

42490

教科書文庫

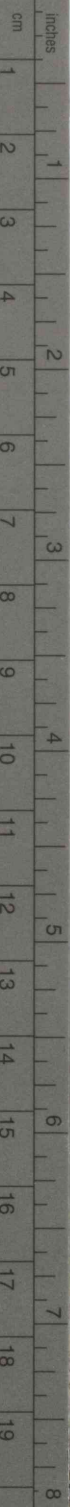
4
810
44-1933
200030
2096

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

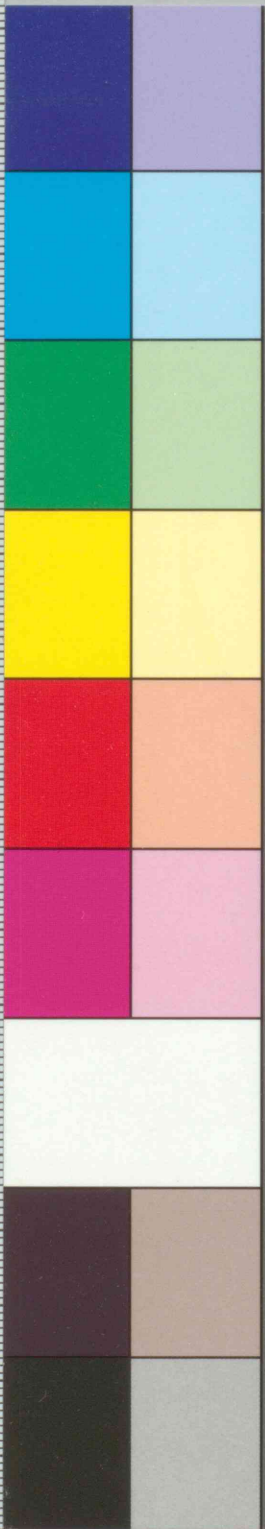
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Fu10
資料室

帝國新國文 卷八



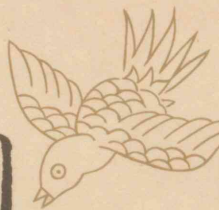
文部省檢定
昭和八年八月十四日
實業學校國語科

資料室

275.9
Fu10

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

帝國



新國文



卷八

株式會社
帝國書院



(第一課参照)

(筆月秋僧)

菅 公



帝國新國文卷八

目次

- 一 日本精神と世界精神
- 二 隅田川の雨
- 三 心の置きどころ
- 四 天の香具山
- 五 閑居雜記
- 六 曼珠沙華
- 七 日野山の奥
- 八 鋏を持つ英雄
- 九 名月
- 一〇 長柄堤の曙

目次

- 藤村 作 一
- 加藤千蔭 一七
- 山本有三 一〇
- 北村透谷 一九
- 近松秋江 二一
- 鴨長明 二七
- 坪内逍遙 四四

一

一一	恩賜の御衣	(大鏡)	五四
一二	鹽原	尾崎紅葉	六〇
一三	平泉と立石寺	松尾芭蕉	六六
一四	芭蕉の臨終	沼波瓊音	六九
一五	鉢木	芥川龍之介	九一
一六	尾形了齋覺え書	三木露風	一〇一
一七	青空の鐘	(平家物語)	一〇三
一八	那須與一宗高	上田秋成	一〇七
一九	夢應の鯉魚	(増鏡)	一一五
二〇	新島守	佐佐木茂索	一二一
二一	蜂	上田秋成	一二六
二二	銀の猫		

二三	歌人西行
二四	故郷の母上へ

藤岡東圃	一三五
八波則吉	一四四

一 日本精神と世界精神

藤村 作

我々は人間として生きると同時に、國民として生きねばならぬことは勿論である。近時若い一部の人達の間には、我々の國民として生きることは第二義のことである、我々は人間として生きねばならぬといつてゐる。併しながら、私の信ずる所では、我々の生活の單位は國民として生きることである、人間として生きることではない。どうしてさう考へるかといふと、世界には多くの民族がある。それ等の民族は特殊な血を傳へ、特殊な靈を傳へたものである。我々日本人はその中の一つである所の日本民族に屬する。我々が人間であり得るのは、日本民族であり得ることを通してでなければならぬ。日本民族でなくしては、どうしても人間たり得ることは出來ないのである。

我々の肉體は日本民族の祖先から傳へられた肉體であり、我々の靈魂は日本民族の祖先から分派し來つたものである。さうして、肉體に於ても、靈魂に於ても、あらゆる世界の他の人類から違ふ所の特徴を有して、この特徴を持つことに依つて、世界のあらゆる他の民族から特殊である。この二つの上の特徴を持つてゐるので、我々は何としても他の民族となることを得ないのである。

この同一祖先から傳へた肉體・靈魂の特徴を共通に持つてゐる我々民族が、團體的結合をなして、その特徴に依つて特殊なる發展をなすことに努力するのは如何にも自然なことである。さうして、かういふ團結ほど世に鞏固な國家團結はない筈である。かういふ我が國の持つ特殊な血族的國家團體は、單に主權・人民・國土を三要素として成立してゐる國家とは違ふ。

我々が日本國民として世界に生きる意義・使命は、他の民族の持

たない特殊な國民性・國民精神を持つて生きるといふ所にあらう。これを發展させ、又これを世界に擴充する所にあらう。我々日本人の最も長じてゐる特徴の上に創造された文化を、世界に擴げることによつて、我々の最も大きな寄與が世界人類になされるであらう。我々にして日本精神を失墜し、日本國民性を小さくしてしまつたならば、我々の世界に生きる意義は失はれ、我々の世界人類に對する使命は滅びるであらう。この意味に於て、我々は人間として生きるといふことを考へる前に、日本國民として、最も正しく且大きく生きるといふことを考へねばならない。日本國民として、最も正しく、大きく生きるといふことは、日本精神を展開させ、これを世界に擴充して行くことに他ならない。

苟くも日本人として、我が祖先の肉體と靈魂とを傳へてゐるものに、幾分なりとも、日本精神を持つてゐないものはない筈である。

けれども、それを確實に把持し、且それを涵養して益立派なものにして行くには、どうしても教育の力を借らねばならない。こゝに國民教育に於ける國史教育の必要があり、國語教育の必要があり、國文學教育の必要があるのである。

所がここに考ふべきことがある。世界は時を逐うて變化しつゝある。時代は暫くも靜止しない。随つて世界は現状のままに長く止るものでない。國民精神は歴史の悠久を通じて一貫して傳ふべきものではあるが、併しそれは歴史を超越して不變であるべきものではない。時代の變化に應じて、その不備不足なるものは常に補はれ、その不適當なものは適當なものに改められて行かねばならないものである。即ちその本幹は動かすべきではないが、その枝葉は常に補はれ、改められ、又その精神の表れは、常に時代に應じて變化し行くのでなければならぬ。これを解り易くい

へば、他の長を採つて、我の短を補うて行くべきものである。ここに於てか國民教育は國民精神の理解涵養と共に、世界精神、現代精神の理解を必要とする。

廣く世界を見渡して見れば、我々は現代に世界を通じて流れてゐる或精神を見出すことは容易である。西洋にある現象が決して西洋に限られないで、我が東洋にも波及して、日本に支那に、同じやうな現象の起ることは、一つや二つに止ることではない。交通・通信機關の發達に由つて、昨日の西洋の事が直に今日東洋に來るといふほどである。これはその底に世界に共通して流るゝ現代精神の在ることを語る事實である。我が日本國は東洋に位置してゐると雖も、日本國民は常にこの世界精神を理解して、世界に適應して變化しつゝ生きて行くことを心掛けねばならない。これを怠るならば、日本精神は固陋に陥り、日本國家は世界に孤立する

に至り、それが爲に國家を滅亡に導くことともなるべきである。國家を世界に孤立の地位に立たせるといふことは、單に國交の上でいはるべきでなく、精神的にもいはるべきことである。さうして、これほど國家の存立・發展に恐るべきことはないのである。それであるから、我々は傳統の日本精神を縦の絲と見、世界に共通する現代精神を横の絲と見ると、この二つの絲が唯我々の中に不調和に併存するといふのでは困る。若し又この二つの絲が混亂して、互に相矛盾し、衝突するやうなことがあれば、彌、困る。否、現にこの二つの精神の不調和・矛盾・衝突は社會の現象として現れてゐる。右と左と相分れて互に相争ひ、相打つ状態に在るのである。ここに於てか、我々はこの縦横二つの絲を以て一つの織物を織出すことを志さねばならない。即ちこの二つの精神の調和・統一を目ざして進むことを最も大切な任務としなければならぬ。

一面に於ては、日本精神を生かし、これを磨いて益、立派な光を放たしめ、又一方に於ては世界精神にも共鳴を保つやうな、穩健中庸であり、大きく東西を抱擁し得る精神を養成することを目標として進むことを努めねばならぬ。換言すれば、日本的であると共に、世界的である所の精神を養成しなければならぬ。民族的であると共に、國際的である所の精神を養はねばならない。極左の精神が國家を危殆に導くことは誰しもが戒心してゐる所であるが、又それと同様に極右の精神も亦國家に取つて危険であらねばならない。我々は飽くまでも、この二つの精神の調和・統一を目標として進まねばならない。

二 隅田川の雨

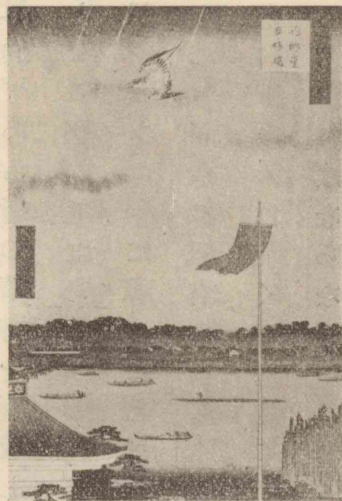
加藤 千 蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほ

加藤千蔭
芳宜園と號す
江戸の國學者
文化五年歿（年
七十四）

石濱
今の東京市淺草
區眞土山・今戸
橋一帶の地
隅田川の右岸

とり石濱の庵に行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわ
たる暁のさまも、處がら世に似ぬものから、こゝは雨のそほ降る日
なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば、音だ



隅田川の雨

(筆重廣)

になくて、軒のしづく三つ四つ落
ちそむるより、籬の萩の下葉の色
づきたるがほろ／＼と散るもあ
はれなり。水のおもては動くこ
ともなくて鏡の如くなるに、雲の
濃きうすきうつろひて、かつ浮び
かつ消ゆる水泡にこそ雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋
は、さしひく潮にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に
出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。
うち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、ははその黄

筏師の

隅田川蓑着て下
す筏師にかすむ
あしたの雨をこ
そ知れ (千蔭)



加藤千蔭

ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひま／＼より長き堤の
見えわたるに、堤のをちなる梢はやうやうに淡墨もてかきけちた
らむごとく、いとしもはるけきは、ただなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。
こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげに
おき出でて、川の瀬の眞菰におり
立てば、みさごの群れきて水の面
に浮べるもをかし。上つ瀬より
筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横
たへ、おのれたむだきて思ふ事な
げにてをり。筏は水のまにまに
流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり
行く人の、やがて堤をあるくさまも、繪によく似たり。すべてひと
日のうちに筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來

みくまりの神
水分の神
水神の森をいふ
隅田川の左岸



山本有三
名は勇造
栃木縣の人
文學者

て、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限なき青
海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてや、
夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし時もとむるに、雁の一つ
ら二つらわたり行くなど、いはむかたなし。暮れはてゝも、猶行く
水の色のみ遠く残りて、川添小田にいはへるみくまりの神のみあ
かしの、海人のいさりびともいふべく、かすかに見えわたるもあは
れなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらむ

—うけらが花—

三 心の置きどころ

山本 有三

伊藤一刀齋景久といへば一刀流の開祖であるから、斯道の人で
なくつても、おほかたは知つてゐると思ふ。全國を武者修業して

歩いて、名ある人と技を闘はすこと前後三十三回、たゞの一度も敗
をとつたことがないといふ劍道の達人である。あるとき遍歴の
みちすがら、一刀齋は上總の國にやつて來た。するとそこに劍槍
に巧みな神子山典膳といふ士が居た。一刀齋が來たといふので、
早速試合を申込んで來た。しかし立合つて見ると、典膳はもとよ
りその相手ではなかつた。そこですぐに一刀齋の弟子となつた。
是が後に一刀流を大成して世に弘めた小野二郎右衛門忠明の前
身である。

忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に従つて全國を武者修業して
歩いた時分の話である。一日典膳は師匠に劍道の極意を訊ねた。
すると一刀齋は

「別に極意といふ程のものはない。たゞ油斷をしないのが第一
だ。」

といつた。そして稽古をしてくれるといふことは殆どなかつたが、坐つてをる時でも、歩いてをる時でも、典膳に少しの油断でもあると、容赦なく「ばかり」と撲りつけた。

あるとき典膳が飯を食つてゐると、いつものやうに「ばかり」と來た。しかし典膳はもう大分修練が積んで居たから、來たな」と思ふや否や、びたりと箸で受け止めてしまつた。

「大分修業が出來て來たな。そのくらの油断をしないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」

一刀齋は微笑しながら褒めた。此時ばかりは、典膳も實に嬉しかつた。いつも撲られ通して、痛い目ばかり見せられてゐたのに、はじめて師匠から褒められたのだから、彼は本當にほつとした。

「お蔭を持ちまして……」

彼は恭々しく師匠の前に頭を下げた。

すると忽ち「ばかり」とやつつけられた。

「また油断をはじめたか。」

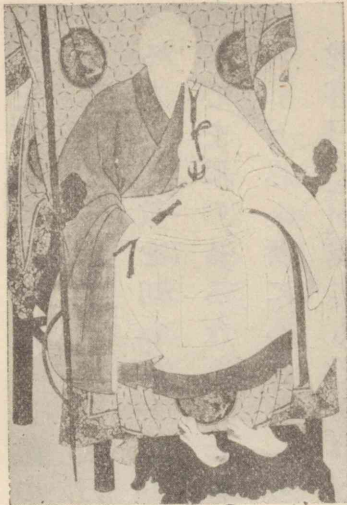
「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば敵を切らんと思ふ所に心を取らるるなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるるなり、(中略)

我答曰く「何處にも置かねば、我身に一ばいに行きわたりて、全體に延びひろがりてある程に、手の入る時は手の用を叶へ、足の入る時には足の用を叶へ、目の入る時は目の用を叶へ、その入る所々に行きわたりてある程に、その入る所々に叶ふなり。萬一もし一所

に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くなり。思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、心をば總身に捨て置き、所々に止めずして、その所々にあつて用を外さず叶ふべし。

心を一所に置けば偏に落るといふなり。『偏とは一方に片付きたる事をいふなり。』(中略)

たゞ一所に止めぬ工夫これ皆修業なり。心をばどこにも止めぬが、眼なり肝要なり、どつこにも



澤庵禪師

置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、心を一方に置けば九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば十方にあるぞ。是は澤庵禪師が禪劍一如の妙趣を柳生但馬守宗矩に垂示した「不動智神妙録」の中から抄出したものである。

澤庵

但馬國の人

江戸時代の高名

な禪僧

品川東海寺の開

山

正保二年歿

油断といふのは心のうつろになることではない、心が一方に取られることをいふのだ。

兎角人は刀を手にすると刀に心を奪はれる。學問をすると學問に心を奪はれる。褒められると褒められたことといゝ氣になる。それが油断である。

「油断をするな。」

「心をどこにもおくな。」

まるで「あべこべ」のいひ方だ。

—山本有三全集—

四 天の香具山

春のはじめのうた

太上天皇

太上天皇
後鳥羽院

ほのくくと春こそ空にきにけらし

天の香具山霞たなびく

攝政太政大臣家百首歌合に春の曙と

いふ心をよみ侍りける

藤原家隆朝臣

霞立つ末の松山ほのくくと

浪にはなる、横雲の空

晚霞といふことをよめる

後徳大寺左大臣

なごの海のかすみの間よりながむれば

入日をあらふおきつしらなみ

百首歌奉りし時

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはん山吹の

はなのつゆそふ井出の玉川

藤原家隆
後鳥羽帝頃の人
新古今集の撰者
壬生二位と稱せ
らる

後徳大寺左大臣
藤原公能の子實
定
高倉帝頃の人

皇太后宮大夫俊
成
藤原俊忠の子
後白河帝の時千
載集を撰す
五條三位と稱せ
らる

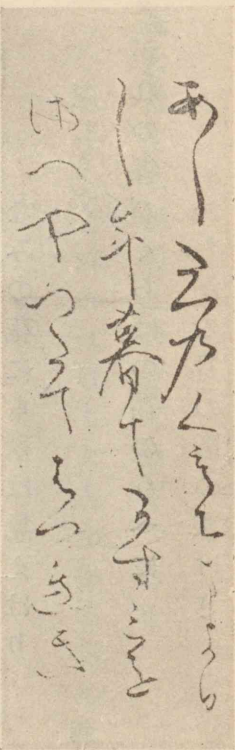
筆蹟

あしたべのくも
ぢまよひし年暮
てかすみをさへ
やへだてはつべ
き

攝政太政大臣
藤原兼實の子良
經
後鳥羽帝頃の人

從三位頼政
源仲政の子
高倉帝の頃の人

式子内親王
後白河帝の皇女



俊成筆蹟

五首の歌人々によませ侍り

ける時 夏の歌

攝政太政大臣

うちしめりあやめぞかをる時鳥

なくや五月の雨の夕ぐれ

夏月をよめる

從三位頼政

庭のおもはまだ乾かぬに夕立の

空さりげなく澄める月かな

百首歌の中に

式子内親王

ながむれば衣手すし久方の

天の河原の秋の夕ぐれ

詠下品上生和歌

藤原定家

新古今集の撰者
京極黄門と稱せ
らる

定家筆蹟

西行法師すゝめて百首歌
よませ侍りけるに
藤原定家朝臣
見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕ぐれ

藤原雅經

みよし野の山の秋風さ夜更けて

故里さむく衣うつなり

藤原家隆朝臣

湖邊月といふことを

鳩の海や月の光のうつろへば

なみの花にも秋は見えけり

藤原清輔朝臣

題しらず

冬がれの森のくちばの霜のうへに

おちたる月の影の寒けさ

前大僧正慈圓

題しらず

庭の雪にわがあとつけて出でつるを

とはれにけりと人やみるらん

北村透谷

五 閑居雜記

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てよりも、黙居冥坐する時に於て、燦爛たる光明を發する事多し。心中の文章によりて心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を装はんとするは、文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往々にして文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんよりも、心中の文章に甘んじたればならむ。

身心を放ちて冥然として天道に任せんか、身心を收めて凝然と

慈圓

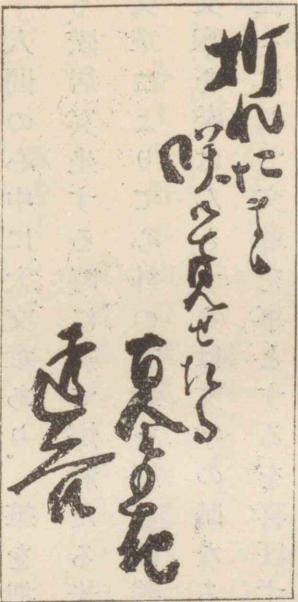
藤原忠通の子
後堀河帝頃の人
慈鎮和尚と謚せ
らる



北村透谷

名は門太郎、
神奈川県の人
文學者
明治二十七年歿
(年二十七)

して寂定に歸せんか。或は猖狂、或は枯寂、猖狂には猖狂の苦味あり、枯寂には枯寂の悲寥あり。魚躍り、鳶舞ふを見れば、聊か心を無
我の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそふにあひては、たちま



透谷筆蹟

ち現身の我に還る。自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば、虚も無く實もなし。

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなからむ。涙なくては誠もなからむ。狂ひに狂ひしバイロンに對しては細繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繋ぎ止むるはこの寶なるべし。遠く行く人の足を踏み止まらずもの、猛き勇士の心を弱くするもの、情違ひ歡薄らぎたる間柄を緊め

バイロン

英國の詩人

(西紀一七六一—一八一四)

筆蹟

折れたまゝ咲いて見せたる百合の花 透谷

固むるもの、涙の外には求めがたし。人の世に涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚だしく悲しきことは跡を絶つに庶幾からんか。

閑雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとするは、人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらざれば、詩人は一の天職をも帯びざる放蕩漢にして終はらんのみ。

大なる「悔改」はまた一個の大信仰なり。「罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて、明日の是を期するは信仰に入るの要諦にして、罪人の

カーライル

英國の文豪

(西紀一七九一—一八三六)

必ずしも自殺せざるは是を以てなり。罪の重荷は忘れざるによりて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

—透谷全集—

六 曼珠沙華

近松 秋江



秋江

本名は徳田浩司

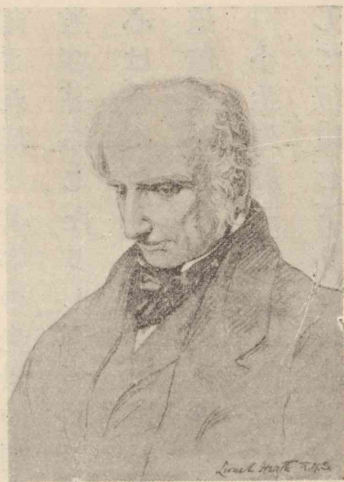
秋江は號

岡山縣の人

文學者

拜啓、曼珠沙華の油畫、たしかに受領致候間、御安心被下度候。曼珠沙華は、吾々の生國邊にては、死人花と申し、あまり心持のよき花にては無之候へども、この花を見る時は、種々幼き折の懐かしき聯想、自然に浮かび出で申候ゆゑ、かうして多年生國を離れて、他郷に流寓しをる吾等に取りては、忘れ得ぬものの一つにて候。幼き頭腦に深く印象をのこしたる故郷の山河の形態、種々の自然の色彩、さして勝れたるものとは思はねども、その色々の形、の年と共に記憶に新になり行くやうに被存候。英國の湖畔

ウオーヅウオース
英吉利の近代詩人
(西紀一七〇一—一八五〇)



スーオウヅーオウ

詩人ウオーヅウオースが、幼時を追憶して、靈魂の不滅を歌へる長詩の心は、この詩を始めて讀みし時には、味解するを得ざりしが、十年を経二十年を経たる今日、時々想ひ浮かべ候へば、清純なる我が心の奥に、獨り靜かに省みて、漸く會得出來候やうに存候。今にして思へば、幼時の心は、恰もこの曼珠沙華の咲き溢れたる初秋の野邊の照り輝く日の光の如く麗かにして、かつ清純なりきと申候べきか。盛夏の炎威次第に衰へて、大空の色いつしか鏡の如く明らかになり、爽かなる初秋の風の野をわたる頃になり、鎮守の宮の馬場西北の山裾なる水車小屋に通ふ土堤、田圃の中の小渠の縁などに、眼の覺むるやうなる眞紅の曼珠

沙華は眞直なる細莖を抜きて咲きつつ、うら盆過ぎて月曆八朔の頃より、一しきり盛んに出づる赤蜻蛉は、洵えたる初秋の日を浴びて、その花の上に群れ飛べる村里の野末の光景、そぞろに想起され候。其等の光景の間に遊び暮らしたりし吾が幼時の心は、今に至りて明かに懐しき追憶となりて残り居り候。

小生先般、三箇月の山居を果して、叡山を下りて歸洛せんとする際、江州坂本日吉の馬場にてこの花の咲けるを見て、ふと如上の遠き往時を憶ひ出て申候。この花は年中大都會の中に在りて暮らす者には、終に見る機会もなく過ぎ申候。吾等先日坂本にて見たるは、何年ぶりなりし



華沙珠曼

か記憶致さず、多分前申しし通り、二十餘年前の幼時に、故郷の野邊にて見し以來の事と存候。それ故に、かゝる多くの人の殆ど見向きもせざる野花に、心を惹かれたるものならんと存候。

曼珠沙華の生花を室内にて眺むることは、いかがなれども、かく油畫にして壁間に掲げ、この花によりて吾が往時を追憶するは、吾が唯今の單調枯淡なる生活に、少しなりとも潤あらしむる手段と存じ、貴君にこの畫の創作を囑したる次第に候。人に見せんとするにもあらず、ただ吾が記憶に感興を生ぜしむれば足り候。然るになか／＼巧みなる出來榮えにて、満足に存候。

私事、先月十三日より輕微なる風邪にて引籠り居り候。昨年、は丁度今時分、歸郷の折柄、流行の世界風邪に罹り、五六日間臥褥致候。今年はさやうの事なきやう、随分用心致し居り候。十月なかばの小春日の暖さに、つい薄着をしながら假寝したる間に

引きしものと覚え候。家にばかり閉ぢ籠り候間にも、四圍の風物次第に移り、二階の窓より眺むる東山の樹々、連日色づき申候。吾等随分長く京都に逗留致候へども、未だ八瀬・大原を知らず候へば、この秋は必ずそなたへ出遊致度存じ居り候。さだめし野趣深き事ならんと存候。帝國美術院展覽會、十一月二十七日より十二月十一日まで、當地にて開かれ候由の廣告ビラ、其所此所の街辻にかかり居り候。その頃ぜひぜひ御入洛相成度、今より御待ち申居り候。展覽會の外にも、京都には繪畫を鬻ぐ商店祇園あたりにならず、それ等をのぞき歩くも興多く候。貴君にはまた格別の事と存候。駿河屋の飴虎屋の饅頭進呈致候、御笑納被下度候。草々

十一月五日

京都東山のほとりより

秋 江

鴨 長明

鎌倉時代の歌人
晩年日野山の庵
に住んだ
建保四年歿（年
六十三）

七 日野山の奥

鴨 長 明

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べる
ことあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をい
となむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が
一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、住家
は折々に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方
丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造
らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛けがねをかけたなり。
もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め
造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力
を報ゆる外は、さらに他の用途いらず。
いま日野山の奥に跡をかくして後、南に日がくしをさし出して、

竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間のひかりとす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上



鴨 長 明

にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに箏、琵琶のおののほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくすぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなる姫垣をかこひて園とす。すなはちもろくの薬草を植ゑたり。假の

庵のありさまかくのごとし。

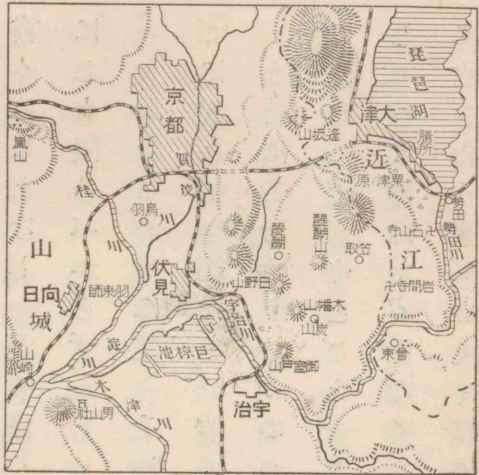
その處のさまをいはば、南に笕あり。岩をたゞみて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにして西の方にほふ。夏は時鳥を聴く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は蝸の聲耳に滿てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。かならず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡のしら波に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめ

満沙彌
 俗名笠麻呂
 養老五年出家
 同七年筑紫觀世
 音寺の別當とな
 った
 原都督
 源經信
 琵琶の名手
 承徳元年歿

て満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江
 をおもひ遣りて源都督のながれをならふ。若しあまりの興ある
 時は、しばしば松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲
 をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳をよろこばしめむとに
 もあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じてみづから心を養ふばかり
 なり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。か
 しこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれづれなる時は、
 これを友として遊びありく。かれは十六歳、われは六十。その齡
 ことの外なれど、心をなぐさむることはこれおなじ。或はつばな
 を抜き、岩なしを探る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの
 田ゐに至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うららかなれ
 ば、嶺に攀ぢのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山・伏見の里鳥

羽・羽東師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるに障りなし。
 あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つづき、炭山を



日野山附近の略圖

越え、笠取を過ぎて、岩間にまうて、石
 山を拜む。もしは又粟津の原を分
 けて蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上
 川を渡りて猿丸太夫が墓をたづね、
 かへるさには、をりにつけつゝ、櫻を
 狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實
 を拾ひて、かつは佛にたてまつり、か
 つは家苞にす。もし夜静かなれば、

窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠
 く眞木の島のかがり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く
 嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きて、父か母かとうた

がひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を掻きおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知られむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして、數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、又いくそばくぞ。ただ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

一方丈記

八 鋏を持つ英雄

ロビンソンクルソーが漂流して、自分一人の生活を發見したとき、第一に困つたのは、食物であり、衣服であり、住居であつた。それは禽獸にひとしい生活であつた。

これを見ても、人間が自立自存するには、一個人としては、どんなに困難であるかがわかる。

自分一人が生きるためには、世の中の何百万人の人が働いてくれたことの一部によつて生活をして居るのである。このことをはつきり考へねばならぬ。

従つて、自分の生活する仕事即ち職業は、勿論生活の手段ではあるが、それは決して生活のためばかりでなく、その職業は、自分を生かすとともに他人を生かすことであることを考へねばならぬ。

五尺の體軀は小さいけれども、その五尺の體軀は、世の中の人のため、衣食住、何ものかを供給してゐる。自己のみを中心として考へれば、食ふことに困らねば、働かなくてもよいといふ誤謬に陥る。自分の生きることは他人を生かす。この點、職業の意義をはつきりさせて置かねばならぬ。職業の苦勞努力は、その中に非常な意義と樂しみとを發見しなければならぬ。勤勞を樂しみながら、身を立て、世の人からは敬はれ、後世に至つて感謝される人となるやうでなければならぬ。感謝されることを目的とするのではない。自分が生きることが他人を生かすこと。この新しい人生觀を持つて、新しい意味での英雄となることを勤勞の目的とすべきである。明治維新以來、歐米の文明が非常な勢で侵入してきた。

これは大變結構なことである。わが國現代の文化も歐米の文明に負ふところが大へん多い。しかしながら、歐米の文化は物質文明である。歐米文化がはいつてきたために、生活標準が漸次高くなつてきた。二三十年前と今日とは生活上に非常な變化がある。これが悪いといふわけではない。今更われわれの生活を二十年三十年の既往にかへすことは、不可能のことであり、また良いことであるともいへない。ただ、物質文明が非常に進んできた現代の人々に、生活の目的は何か？といふことをあらためてはつきりさせることが必要である。

近世に於て、物質主義と個人主義との文明が發達し、世界を風靡し、既往百年位經過した。このことは決して悪いことではなかつ

た。

壓迫せられた封建時代から脱出して、その壓迫がとりはらはれて、各人が自由に競争することが出来、各々の能力を伸ばして競争した。その結果が、今日の進歩した時代を現出したのである。

がこの個人主義物質主義は今日では行き詰つた。このやうな主義では世界の平和はもたらされないのでみならず、各個人の幸福も亦もたらされないことゝなつてしまつた。

現代の産業はひとり農村といはず、工業も商業も漸次組合の結成を必要とする。従來の個人主義ではこの現代に最も必要な組合の結成が不可能である。時代は進み、個人主義精神から共同精神にうつりつゝある。自分を生かすといふことのみを考へる時、個人主義に一面の眞理があるけれども、そのまま、何處までも進めば、遂に共同出来ないのである。ここに於て共同生活と個人生活

との連繫をはつきりつかまなくてはならぬ。そこに、洗煉された個人主義共同生活の一員である自分一人が、即ち共同主義の自分であることを知るのである。又そこに、勤勞即ち充實した人生そのものと考へることが出来るのである。

現代には、自分の仕事は生活の手段であつて、自分の生活はその時間以外であるといふ考の人が相當澤山ある。日本ばかりではなく、物質文明の進んだ國ほど、その一部になかなか多い。この物質文明からくる人生觀の大錯誤を打破しなければならぬ。

それがためには、勤勞即ち樂しみと考へるやうにすることであるが、それに二つの考へ方がある。

一、勤勞は、自分の生きる手段であるのみならず、天下を生かすことであると考へること。

二、勤勞生活を務めてあり、義務であると考へずに、仕事を自分の

愉快な生活として、何か研究工夫して、新機軸を出さうと考へるこ
と。

研究工夫といふことには、自分の精神の創作があらはれてくる。

人間にとつては自己の創作、創造
ほど愉快なことはない。創作す
るとき勤勞即ち楽しみである。
この考によつて勤勞の苦しみを
楽しみとすることである。

曾國藩は、支那清朝末期の大人



曾國藩

物である。彼は大學者であり、大政治家であり、大軍人であつた。

長髮賊の亂を平定し、末期の清朝をよくさへた人である。その
日記は有名なものであるが、六十一歳の時の彼の日記の一節にか
ういふ意味のことがある。

長髮賊の亂
清の宣宗の時洪
秀全の起した亂

「自分の見聞したもので、一藝一能に達した者で勤勞を厭は
ぬ士は、必ず相當の位置を得てゐる。たとひ一藝一能の士でも苦
勞を厭ふ者は、大部分は失敗し、成功しても永續きがしてゐない。
依つて自分は六十一歳になるが一日中必ず何か勤勞する。『
一日なさざれば一日食はず』禪門の大徳、百歩和尚の談もこれと
同じ意味である。

殊に農業ほど勤勞を必要とし、創造創作の機會を多く持ち、自己
のためになると同時に、世の中のためになるといふことがはつき
りしてゐる職業はない。

而も新しい目標、共同主義、共同生活を實行し、共同生活を確立す
るのに一番便利なのは農村である。今後の社會の進歩改善をし
て行く策源地は何より農村である。新しい人生觀が農村から生
まれて來、新鮮な人生の目標が農村に高く掲げられなければなら

ぬ。といつて私は都會を無視するわけではない。都會の工業が盛んであればある程、これを培養して行くのは農村である。農村と共に、都會も農村の精神を以て進まなければならぬと思ふ。

徒らに時代の尖端が示す物質文明の國を、これこそわれわれの求むべきものであり、進むべき道であると思ふことは大いなる間違ひである。

また新しい人生觀、共同主義の訓練習慣をなすには、青年團ほど相當な團體はない。自治共同は從來のやうな空漠とした共同でなく、産業そのものに即した自治共同であつて、自分の社會的立場をはつきり自覺する者によつて結ばれた共同でなければならぬ。青年團ばかりでなく、壯年團の組織もまた肝要なことである。

青年諸子よ！来るべき時代は諸君の時代である。その時こそは、正しからざるものは除かれ、濁れるものは清めら

れ、沈滞せるものは潑刺となり、摸倣は獨創にその光を奪はれ、怠惰は努力にその席を譲り、抗争と紛亂とは、整調と諧和とが執つてかはるのでなければならぬ。

英雄よ出でよ！自然に鉞をかついだまゝの英雄よ出でよ！かういふ英雄であれば努力によつて誰でもなり得る。各自の仕事の中で、たまたま天下を刮目せしむることが出来れば、これ天下の英雄である。しかし天下を刮目せしむるか否かは問題でない。天に一物を加へ得たるもの、これ英雄である。

天下にこの氣溢るゝのとき、國家の充實もまた非常なものがあ

る。世界の何物をも恐れない。英雄兒よ、出でよ、次の時代に着目して、職業の上に、新しい人生觀を確立する英雄兒よ！出でよ！

—後藤文夫の講演に據る—

九名 月

芭蕉
松尾氏
伊賀の人
元禄七年歿

あかくと日はつれなくも秋の風
草枕犬もしぐるるか夜の聲

芭蕉

其角

榎本氏
江戸の人
寶永四年歿

名月や疊の上に松の影
冬來ては案山子にとまる鳥かな

其角

筆蹟

雨冷に羽織を夜
の裳ならん
其角



其角筆蹟

嵐雪

服部氏
淡路の人
寶永四年歿

黄菊白菊その外の名はなくもがな

嵐雪

丈草

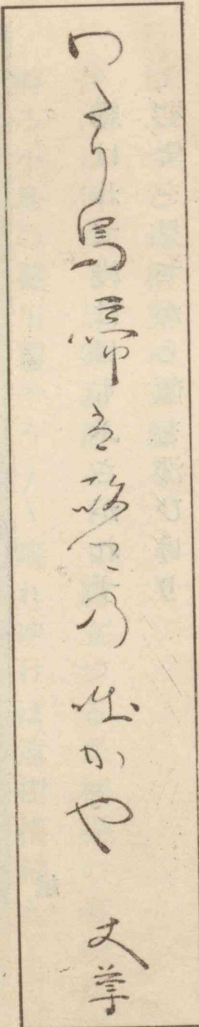
内藤氏
尾張の人
元禄十七年歿

ふとん着て寝たる姿や東山
行燈にとぶや袂のきりぎりす
幾人か時雨かけぬく瀬田の橋

丈草

筆蹟

わたり鳥啼は故
郷の咄かや
丈草



丈草筆蹟

去來

向井氏
肥前の人
寶永元年歿

秋風や白木の弓に弦はらむ
應々といへど叩くや雪の門

去來

惟然

廣瀨氏
美濃の人
寶永七年歿

別るゝや柿食ひながら坂の上
水鳥やむかふの岸へつういく

惟然

凡兆
春花園と號す
加賀の人
歿年不詳

百舌鳥なくや入日さし込む女松原
ながくと川一筋や雪の原

凡兆

筆蹟

山吹のつぼみも
青し芳野河
凡兆



凡兆筆蹟

越人

越智氏
肥後の人
元祿十五年歿

霧はれて棧は目もふさがれず
初雪を見てから顔を洗ひけり

越人

坪内逍遙

名は雄藏
逍遙は號
岐阜縣の人
文學博士

一〇 長柄堤の曙

坪内逍遙

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、残んの星を一つづつ鐘が消し行くいなための

長柄堤

今の大阪市北区
と西成區との間
長柄川の堤
茨木
大阪府三島郡茨木町

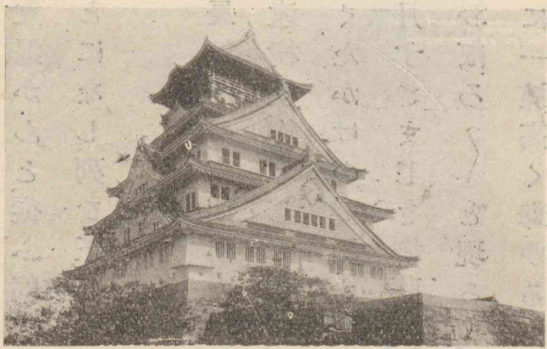
長柄堤に秋閑けて、一村蘆に風黒く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白けゆく千草が蔭の蟲の聲、哀はいとまざるらん。片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、丑の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづしづと長柄堤に差懸る。 (中略)

後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明がた、時に轉る小鳥の聲、川霧やうくと晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、くたかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る方の月すさまじき柳蔭、枯葉枝疎にして風飄々、見る目も昏し、遠方におぼろくと現るゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに一棟高く聳ゆるは、市におほ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、

加藤肥州
加藤清正
肥後守

千姫君
徳川秀忠の女
秀頼の室
毘盧舍那佛
京都方廣寺の大
佛をさす

まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相闘げば、大政所の御方さへ、當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有様。唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく、いひかけて聲曇らせ、



(在現) 城 阪 大

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや、この且元がすること、爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。」「御家長へに康かれ。」と祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難

題は、只前門の虎にして後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、

恠へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「是しかながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の毘に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元がこの腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く、兩手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことどもぢやなあ。」
すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせ

ず只一騎残霧つんざき一散に汗馬に、中を走り來る木村長門守
重成、

長「市正殿に候な。」

市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間、かけ寄るくつわ

づら、右手におり立ち顔見

合せ、言葉はなくてそゞろ

にもまづ袖濡る、朝露や、

風飄々たる枯柳の枝、入り

がたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを長柄堤に留むらん。

長「最早豊臣の御社稷も愈々末となつたるか、棟梁とたのむ足下まで、

佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは、

某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の



(劇) 成重と元且

織田入道

織田信雄常眞入

道

寛永七年歿

その間に思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、
大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入
道殿、日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばか
り。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我
意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ
切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思
ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐
なさ。」

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申せし如く、お家の大仇

は彼等にあらす。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。

某とてもこの度の一條遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の

至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば破綻生

ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆泡沫。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」

長「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」

市「されば、今御城に、兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。」

長「してその智謀の將とは。」

市「いま九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戦以來關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺へるを、先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以ていそぎ彼を招かるべし。合

九度山

和歌山縣伊都郡

九度山町

高野山の北口

眞田安房守

名は昌幸

慶長三年歿

戦の進退は一切彼の人に任せられよ。その他、關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附け置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ、第一の手配なり。」

長「してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。」

市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業のためと伴り、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」

長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」

市「甲冑・兵具も乏しからず。」

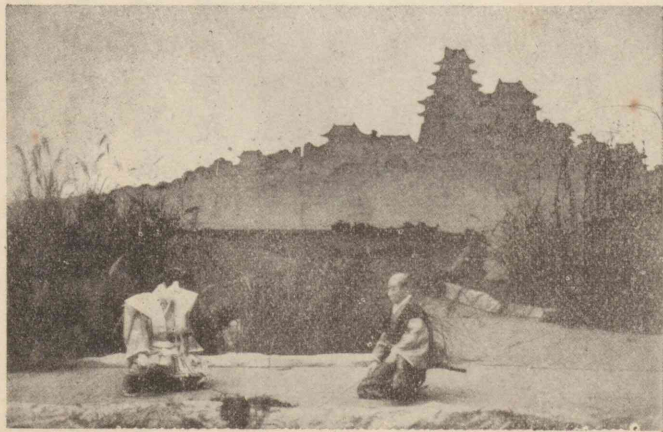
長「城は名に負ふ南山不落。」

市「眞田・後藤の智勇をもてこの堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときは、」

長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懐け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、」

市「なか／＼三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」

長「まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我亦一方を承り、速水・御宿・和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹翻さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士



(面臺舞) 別訣の堤柄長

心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰せに従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ市正殿。」

市「ほゝ頼もしゝ、頼もしゝ。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照し、成行く末をかんがみれば、」

長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」

市「上御發明に渡らせらるれど、」

長「讒佞之を蔽ふが故、」

市「地の利はあれども人の和なく、」

長「故太閤が御威武にをのゝき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」

市「有明の影薄れつゝ、」
 長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」
 市「新日、東天に昇るといふ」
 長「世の成行の」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月ながめ入り、しばしは愚痴に
 おちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのくくと明けにけり。

—桐一葉—

一一 恩賜の御衣

(大 鏡)

醍醐の帝の御時、時平の大臣左大臣の位にて、年いと若くおはし
 ます。菅原の大臣は右大臣の位におはします。そのをり、帝御年
 いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下させた

まへりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の
 御年五十七八ばかりにやおはしましけむ。共に世の政をせしめ
 給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれめでたくおはしまし、御心お
 きて、もことの外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、才



(筆邦雅本橋) 眞道原菅

もことの外に劣り
 給へるによりて、右
 大臣御覚えことの
 外におはしました
 るに、左大臣安から
 ず思したるほどに、

昌泰四年
 醍醐天皇の御代

さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、
 昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。
 この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは

皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて
悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、
「小さきはあへなむ」と公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひ
しぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを
同じ方にだに遣はさざりけり。方々にいと悲しく思召して、御前
の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事により、かく罪せられ給ふをからく思し嘆きて、やがて山
崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、哀れに心細く

亭子の帝
宇多法皇

山崎
今の京都府乙訓
郡大山崎村山崎

おぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくと

隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨の國におはしましつきて、明石の驛うまやといふ處に御宿り
せしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて作らせ給
へる詩、いと哀し。

驛長無驚時カレ、ク、ニ變改アリ 一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ
夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり

なげきよりこそもえはじめけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、
山わかれとびゆく雲の歸り來る

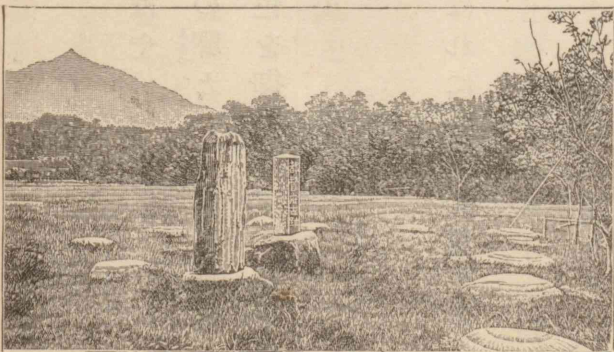
かげ見るときぞなほ頼まるゝ
さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、
海ならずたゝへる水の底までも

きよき心は月ぞてらさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げ
に月日こそは照し給はめとこそはあめれ。
筑紫におはします處の御門もかためて
おはします。大貳の居處は遙かなれども、
樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じや
られけるに、又いと近く觀音寺といふ寺の
ありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ
給へる詩ぞかし。

都府樓、纔看瓦色

觀音寺、只聽鐘聲



都督府跡

大貳
太宰大貳藤原興
範

觀音寺
福岡縣筑紫郡水
城村觀世音寺

文集
白氏文集
七十一卷
白居易
字は樂天
唐の詩人

これは文集の白居易が「遺愛寺、鐘敲枕聽、香爐峯、雪撥簾看」といふ
詩にもまさゞまに作らしめたまへり。」とこそ昔の博士どもは申し
けれ。

またかの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、ま
だ京におはしゝとき九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、この
大臣の作らせ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御衣賜はせ
給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞ
そのをり思召し出でて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼

秋思、詩篇獨斷腸

恩賜、御衣今在此

捧持、毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。
かくて、このおとゞは筑紫におはして、延喜三年癸亥二月二十五
日にうせたまひしぞかし。御年五十九。

延喜三年
醍醐天皇の御代



尾崎紅葉

紅葉は號
東京の人
文學者
明治三十六年歿
(三十七)

那須野
下野國那須郡の
原野

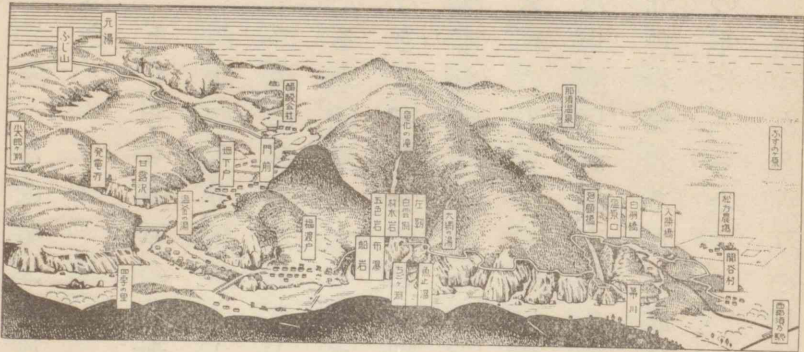
一二 鹽原

尾崎紅葉

車は馳せ景は移り、境は轉じ客は改まれど、我は易らざるその悒鬱を抱きて、やる方なき五時間の獨に倦み疲れつゝ、はじめて西那須野の驛に下車せり。直に西北に向ひて、今なほ茫茫たる古の那須野に入れば、天は闊く地は遐に、たゞ平蕪迷ひ斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮らず、漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くる處に涼々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。

輒ち橋を渡りて僅に行けば、日光暗く、山厚く壘み、嵐氣冷やかに壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の後には、密樹に聲々の鳥鳴き、前には幽草歩々の花を開き、愈、登れば遙に木がくれの音のみ聞えし流の、水上は浅く見えて、すはやこゝに空山の雷白光を放ちて崩

この緒よりや
琴の音に峰の松
風通ふらしいづ
れの緒よりしら
べそめけむ(拾
遺集)



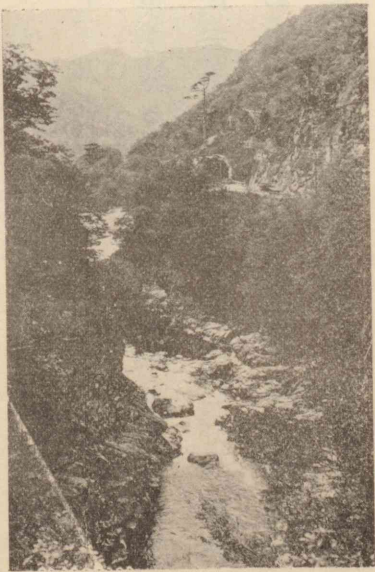
鹽原溫泉鳥瞰圖

れ落ちたるかと、すさまじかり。道の右は山を削りて長壁を成し、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂しかけたる細瀑の珊々として灑げるは、嶺上の松の調べも定めてこの緒よりやと見捨てがたし。

車を驅りて白羽坂を躓えてより、見返橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四

十五湯。なほ數ふれば、十二勝十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

そもそも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨にして、いたる處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯をすぐれば、根本山、魚止瀧、兒が淵、左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗に、布瀑龍が鼻材木岩、五色岩、船岩など眺め行けば、鳥居戸、前山の翠衣に染みて福渡戸の里に入るなり。

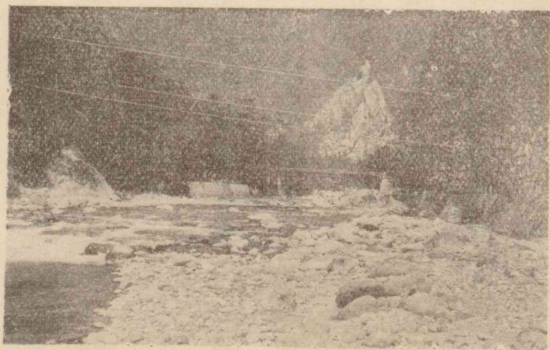


川 箒

途すがら前面の崖の處に躑躅の残り、山藤の懸れるが甚だ興あ

りと目とまれば、又この邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く蔽へる岸樹は、陰々として眠るに似たり。車夫を顧みて處の名を問へば、不動澤と云ふ。

遙に望めば、行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かさるゝ異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見上ぐる絶頂には、はらはらと松も危く立ち竦み、幹竹割に割り放ちたる断面は、半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名に高き天狗巖なれ。」とはるかにも、車夫は案内す。足にまかせてかの巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これがために鼓怒咆哮し、噴薄激盪して奔馬の亂れ競ふが如し。



鹽原 (天狗岩附近)

蒲生氏郷
會津藩の城主
文祿四年歿

寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色を
なして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀恐ろしげに蹲りて、老木の蔭
を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜な夜な天狗巖の魔風に誘はれて、吼
えもしぬべき怪しの物なり。「その昔蒲生氏郷この處に野立ちせ
ること有るに因りて野立石と申す。」と例のが説き出す。

率たる車に乗りて急ぐ。甘湯澤、小太郎が淵など思ひやりつゝ、
鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。一村十
二戸、温泉は五箇所に湧きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼ぶ
は、南にあたりて箒川の緩く廻れる磧に臨めり。俯せば水石の鄰
鄰たるを見、仰げば西は富士、喜十六の翠巒と對して清風座に滿ち、
袖の澤に落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如
き吉井瀑となり、東北は山また山を重ねて琅玕の玉簾深く、一望の
下丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるま

喜十六
鹽原富士の西南
に連る山

じき別境なり。

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき
巖と激しき流との爲に、いく度か魂飛び肉消えて、理むる方なき亂
れたる胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべてを忘れ
たり。誠によくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ晩かりし。
山の麗しといふも壤の堆きのみ。川の暢けしといふも、水の逝く
に過ぎざるのみ。牢として抜くべからざる、わが半生の痼疾は、い
かでか壤と水との醫すべきものならむと思ひ悔りたりし己れこ
そ、まづ侮らるべき愚の者なりけれ。見よ見よ、木々の緑も、浮べる
雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、峙つ嶽も、吹きくる風も、日の光も、鶏の
鳴く聲も、空の色も、皆自ら浮世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲
を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、心はかの雲と軽く、この水と淡し。希
はくは今より此の如くにしてわが生を終へむかな。――金色夜叉――

一三 平泉と立石寺

松尾 芭蕉

一 平泉

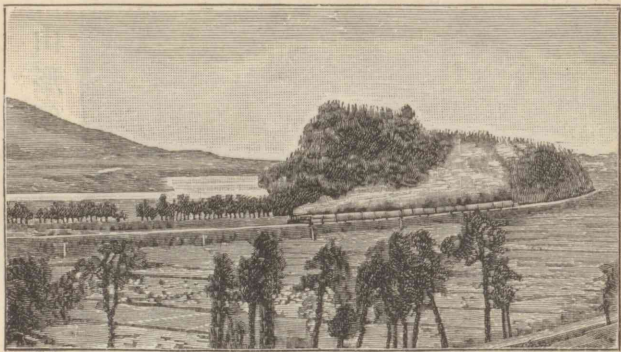
十二日平泉と心ざし、あねはの松緒絶の橋など聞き傳へ、人跡ま
 れに雉兔藪蕘の往きかふ路、そことも分かず、蹈み違へて、石の巻と
 いふ港に出づ。「黄金花咲く」と詠みて奉りし金華山海上に見わた
 し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつゞきた
 り。思ひかけずかかる處にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更
 に貸す人なし。やうく貧しき小家に一夜を明かし、あくれば又
 知らぬ道まよひ行く。袖の渡り尾駁の牧眞野の萱原などよそに
 見て、遙かなる塘をゆく。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふとこ
 ろに一宿して平泉にいたる。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の夢にして、大門の跡は一里こなたに在り。秀

石の巻
 陸前國牡鹿郡北
 上川の河口
 金華山
 牡鹿半島の東方

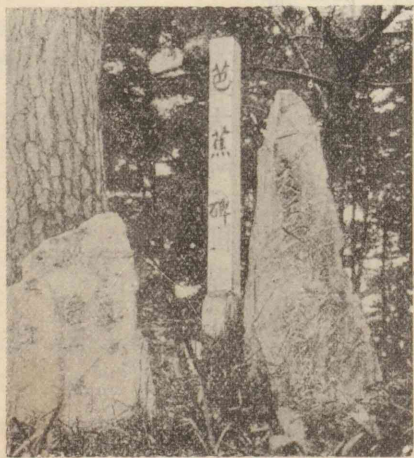
三代
 藤原清衡・基衡・
 秀衡

金雞山
 秀衡が平泉の鎮
 護として築いた
 もの



高館

むらとなる。國破れて山河あり、城
 春にして草青みたりと、笠打ち席き



(泉平) 碑句蕉芭

國破れて
 國破レテ山河在リ
 城春草木深
 (杜甫)

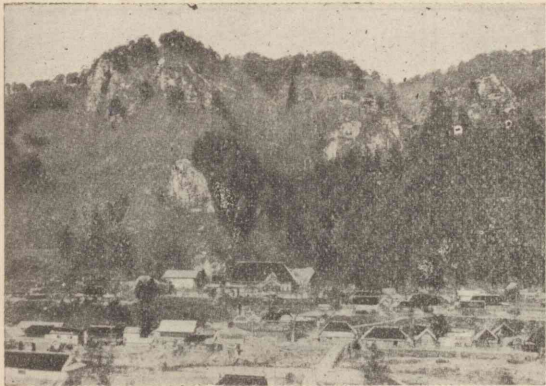
て、時の移るまで涙を落しはべりぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

二 立石寺

山形領に立石寺りつしやくじといふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、ことに

清閑の地なり。一見すべきよし、人の勸むるによりて、尾花澤より取つてかへし、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる。岩に岩を重ねて山とし、松栢年ふり、土石老いて、苔なめらかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず。岸をめくり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄みゆくのを



立石寺を望む

慈覺大師
天台宗の高僧
比叡山第二世の
座主
貞觀六年寂

み覺ゆ。

しづかさや岩にしみ入る蟬の聲

―奥の細道―

一四 芭蕉の臨終

沼波 瓊音

九日の日は晴れて明けた。皆が介抱して、芭蕉の夜具も寝衣も、さつぱりと新しいのに取換へさせた。その新しい夜具と寝衣は、花屋の主人の厚意で調べてくれたものであつた。仁左衛門と云ふ人は、毎日見舞に裏座敷へ來ると云ふやうなことはしないで、母屋に居て何かと、芭蕉及び連衆の便宜を、陰になつて黙つてして居ると云ふ人であつた。貸主が見舞に來ると云ふ事が、一同の氣がねになることをよく心得て居る苦勞人であつた。

鼠色の丸頭巾、白いさわ／＼とした絹の寝衣を着て、けば／＼しからぬ唐草模様のふつくらと綿の多い絹夜具に寝た芭蕉の姿は



名は武夫
瓊音は號
名古屋市の人
國文學者
俳人
昭和二年歿(年
五十一)

神々しく見えた。不淨の病とは云へ、病人のたしなみの宜いのと、世話の行届くのとで些の悪臭も無く、ただ空炷の香が、炷かぬ折も、室に漂つて居るのみであつた。

着換は面倒であつたが、清爽の心持を芭蕉は嬉しく思つた。



芭蕉の臨終

芭蕉

(筆山筆邊渡)

「何處かで行倒れになる筈のわしが、こんな美しい褥の上で、しかも皆の深切な介抱を受けて死ぬとは、わしは思ひの外仕合せ者ぢやつた。」

吞舟
大津の人
俳人

吞舟や、昨夜の句を皆に見て貰はうか。まだ掃除やら何やらで、丁度皆が病室から次の間へかけて居たところであつた。昨夜御句が出来たと聞いて皆そこに坐つた。只丈草と去來とが勝手の方へ行つてゐたので、これも呼んで來た。

吞舟が書いたのを去來に渡した。去來は一禮して、心で一度讀んでみて、さて高聲に、

旅に病んで夢は枯野を駈けめぐる

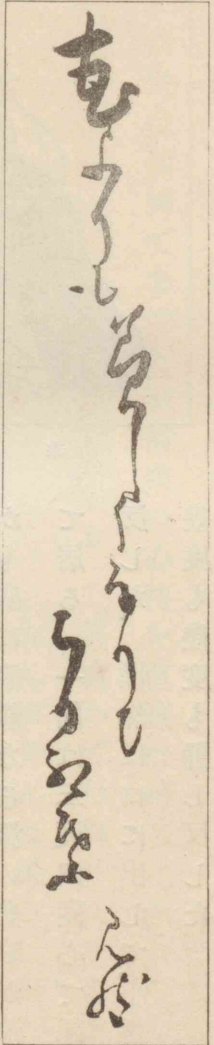


去 來

と讀んだ。一同は各、自ら心で再讀してみた。企てては成るべからざる作と誰もく感じた。そこには物狂ほしさ、妻さが溢れて居るが、しかも底に寂靜なる深い悲哀が流れて居る。一同は三度四度心で誦し反した。惟然は口に出して、小聲で幾度も幾度も誦し反した。

「なほ駈けめぐる夢心とも、枯野をめぐる夢心ともして見たが、やはり夢は枯野をがよいやうに思ふが。」

「夢は枯野を駆けめぐる、これでございませぬ、これでございませぬ、まことに拜誦致せば誰も毛髪爲に動くの名章と存じまする。」



支考筆蹟

筆蹟

花よりも美しく
なりてちる紅葉
見龍

支考

各務氏
美濃の人
享保十六年歿

と支考が感涙を泛べつゝ言つた。

「さうかな。これは辭世ではない。辭世でないこともない。ただ病中の心を寫したまでぢや……思へば、生死の一大事を前に置きながら、如何に生涯好んだ風流とは云へ、これも妄執ぢや、妄執ぢや。……わしの妄執も、もはやこれ限りぢや……」
何とも云へぬ黒いものが、一同の心を蔽うて又過ぎた。

「妄執では決してござりませぬ。朝雲暮雨山水野鳥日々の見る

もの聞くもの、すべて御捨てなさらぬ老師の心身は、たゞこれ一切風雅でござりまする。かやうな重病の床に、尙且かかる風神の名章をお唱へ遊ばす。末代の龜鑑でござりまする。」



惟然筆蹟

筆蹟

すゞしさの風流
ならば欲なけれ
いせん

と去來は且泣き且言つた。

門葉の喜の爲や、他門の聞えの爲の御作ぢやないわと、惟然はむらむらとなつたが黙つて、自ら感ずる所を深く感じて居た。

芭蕉はもううとくととして居た。時々はつと目を見開くので、次郎兵衛が用を聞かうとすると、又うとくと眠つた。芭蕉の目のまはりには何となう黝い色が浮いた。成るべく多人數病床に

侍することにした。

この日はよく昏睡した。人々は高い聲を出すのを憚つた。さうして森として暮れて行つた。
―芭蕉の臨終―

一五 鉢 木

ワキ
僧(北條時頼)

ワキ 行くへ定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。

これは一所不在の沙門にて候。我、この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづこの度は鎌倉に上り、春になり、修行に出でばやと思ひ候。

信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ憂き世を離坂、墨の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけり。
ワキ 急ぎ候程に、上野の國佐野のわたりに着きて候。あら笑止や、

信濃なる
信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠方人の見やはとがめぬ(伊勢物語)大井山
信濃國北佐久郡大井庄にある山

友の里

同郡伴野庄

離坂

同郡香掛と輕井

深との間にある

うすひ川

碓氷峠から出で

て上野の烏川に

入る

板鼻

上野國高崎の西

佐野

高崎市の東南

ツレ

佐野源左衛門尉

常世の妻

シテ

常世

雪は鵝毛に似て
雪、似、鵝、毛、に、似、て
散、亂、人、被、鶴、
髻、立、徘徊
(白樂天)

又雪の降り來りて候。この處に宿を借らばやと思ひ候。いか

にこの家の内へ案内申し候。

ツレ 誰にて渡り候ぞ。

ワキ これは修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。

ツレ 易き御事に候へども、主の御留守にて候程に、御宿は叶ひ候ま

じ。

ワキ さらば、御歸までこれに待申さうするにて候。

ツレ それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、この

由を申さばやと思ひ候。

シテ あ、降つたる雪かな。いかに世にある人のおもしろう候らん、それ、雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴髻を被て立つて徘徊す。といへり。されば、いま降る雪ももと見し雪にかはらねども、我は鶴髻を被て立つて徘徊すべき袂も朽ちて、袖せばき細布衣、

陸奥のけふの寒さをいかにせん。あら、面白からずの雪の日やな。

あら、思ひよらずや。この大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ。

ツレ さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候程に、御留守の由申し候へば、御歸まで御待ちあらうずる由仰せ候程に、これまで参り候。

シテ さてその修行者はいづくに渡り候ぞ。

ツレ あれに御入り候。

ワキ 我等が事にて候。まだ日は高く候へども、あまりの大雪に前後を忘れて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。

シテ 易き御事にて候へども、あまりに見苦しく候程に、御宿は叶ひ候まじ。

ワキ いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。平に一夜を御貸し候へ。

シテ とめたくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、なか／＼御宿は思ひもよらぬ事にて候。これより十八町あなたに山本の里とてよきとまりの候。日の暮れぬ先に、一足も早く御出で候へ。

ワキ さては、しかと御貸あるまじいにて候か。

シテ 御痛はしくは存じ候へども、御宿はまゐらせがたう候。

ワキ あら、曲もなや。よしなき人を待ち申して候ものかな。

ツレ あさまじや。我等かやうに衰ふるも前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ後の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を参らさせたまひ候へ。

シテ さやうに思召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。いやこの

駒とめて
藤原定家の歌

三輪が崎
大和國三輪山の
麓

大雪に遠くは御出て候まじ。某追付き止め申し候べし。「のう
のう、旅人、御宿参らせうのう。」餘りの大雪に、申すことも聞えぬ
げに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、いま降
る雪に行方を失ひ、一つところに佇みて袖なる雪を打拂ひ打拂
ひしたまふけしき、古歌の心に似たるぞや。「駒とめて袖打拂ふ
かげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。」かやうに詠みしは大和
路や三輪が崎なる佐野のわたり。これは東路の佐野のわたり
の雪の暮に迷ひ勞れたまはんより、見苦しく候へど、一夜は泊り
たまへや。

げにこれも旅の宿。假初ながら値遇の縁。一樹の陰の宿りもこ
の世ならぬ契なり。それは雨の樹陰、これは雪の軒ふりて、うきね
ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。

シテ いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、参らせ

うずるものもなく候はいかに。

ツレ 折節これに粟の飯の候ほどに、苦しからずば参らせられ候へ。

シテ さらばその由申し候べし。

いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、何にてもまゐらせ
うずる物もなく候。折節これに粟の飯のある由申し候。苦し
からずば聞召され候へ。

ワキ それこそ日本一の事にて候。たまはり候へ。

シテ のう、聞召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ。

ツレ 心得申し候。

シテ 總じてこの粟と申すものは、いにしへ世にありし時は歌に詠
み詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命をつ
ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年。その邯鄲の假枕、
一睡の夢の覺めしも粟飯炊ぐ程ぞかしあはれや、げに我もうち

盧生の夢
盧生が夢に王侯
となつたが覺む
れば身は前と同
じ貧書生であつ
たといふ故事
「異聞録」に見ゆ

も寐て、夢にも昔を見るならば、慰むこともあるべきに、のう御覽
ぜよ、かほどまで住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら寐
られねば夢も見ず。なに思出のあるべき。

シテ 夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚い
てあてまゐらせ候べき。思ひ出したることの候。鉢の木を持
ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキ げに、鉢の木の候よ。

シテ さん候。某世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集め持ち
て候ひしを、かやうの體に罷りなり、いや、木好きも無用と存
じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅櫻、松を持ちて候。あ
の雪持つたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜の御もて
なしにこれを火に焚き、あて申さうずるにて候。

ワキ いや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう

候へども、自然又おこと世に出でたまはん時の御慰にて候間、な
かなか思ひもよらず候。

シテ いや、とてもこの身は埋木の花さく世に逢はんこと、今この身
にて逢ひがたし。

埋木の
埋木の花さくこ
ともなかりしに
身のなるはてぞ
かなしかりける
(源頼政)



(筆音朝堀小)

鉢 ツレ たゞいたづらな
木 る鉢の木を御身の
爲に焚くならば、
シテ これぞまことに
難行の法の薪とお
ぼしめせ。

ツレ しかもこの程雪降りて、
シテ 仙人につかへし雪山の薪、
ツレ かくこそあらめ。

シテ 我も身を捨て人のための鉢の木切るとてもよしや惜しから
じ。

と雪打拂ひて見れば、おもしろや、いかにせん。まづ冬木より咲き
そむる窓の梅の北面は雪封じて寒きにも、こと木よりまづ先だて
ば、梅を切りやそむべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折りか
け垣の梅をだに情なしと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて
思ひきや。櫻を見れば春ごとに花すこし遅ければ、この木や佗ぶ
ると心を盡しそだてしに、今はわれのみわびて住む家櫻切りくべ
てひざくらになすぞ悲しき。

シテ さて松はしも、げに枝を矯め、葉をすかして、かゝりあれと植ゑ
おきしそのかひ今はあらし吹く、松はもとより煙にて薪となる
もことわりや。切りくべて今ぞみかきもり衛士の焚く火は御
爲なり。よく寄りてあたり給へや。

見じといふ
山里の折りかけ
垣のうめの花い
かなる人の見じ
といふらん
(菅原道真)

みかきもり
御垣守衛士のた
く火の夜はもえ
て晝は消えつゝ

ものをこそおも
へ 詞花集(大
中臣能宣)

ワキ 近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ 御出により我等も火にあたりて候。

ワキ いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ。承りたく候。

シテ いや、某は名字もなきものにて候。

ワキ 何とおほせ候とも、唯人とは見えたまはず候。自然のときの
ためにて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。

シテ この上は何をか包み候べき。これこそ佐野源左衛門尉常世
がなれる果にて候。

ワキ それは、何とてかやうの散々の體にはなりたまひて候ぞ。

シテ その事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となり
て候。

ワキ のう、それは、何とて鎌倉へ御のぼり候て御沙汰は候はぬぞ。
シテ 運の盡くるところは、最明寺殿さへ修行に御出候上は候。か

最明寺殿
北條時頼

やうに落ちぶれては候へども、御覽候へ、これに武具一領、長刀一枝、またあれに馬を一匹つないで持ちて候。これは、只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足とつて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳參じ、着到につき、さて合戦はじまらば、敵大勢ありとても一番にわつて入り、思ふ敵と寄合ひ打合ひて死なん、この身の、このまゝならば、いたづらに飢につかれて死なん命。なんぼう無念の事候ぞ。

ワキ よしや、身のかくては果てじ。たゞ頼め、われ世の中にあらんほど、またこそまゐり候はめ、暇申して出づるなり。

ツシテ 名残をしの御事や。初は包むわが宿のさも見苦しく候へど、

しばしはとまりたまへや。

ワキ とまる名残のまゝならば、さて幾度かゆきの日の、

たゞ頼め
たゞ頼めしめぢ
が原のさしも草
われ世の中にあ
らんかざりは
(新古今集)

ツシテ 空さへ寒きこの暮に、

ワキ いづこに宿をかりごろも、

ツシテ けふばかりはとまりたまへや。

ワキ 名残は宿にとまれども、暇申して、

ツシテ 御出か。

ワキ さらばよ、常世。

ツシテ また御入り。

ワキ 自然鎌倉に御上りあらば御尋ねあれ、けうがる法師なり。

かひなくしくはなけれども、公方の縁になり申さん、御沙汰捨てさせたまふな。

といひすて、出船のともに名残や惜しむらん。

後シテ
常世

後シテ いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢ののぼるといふはまことか。

なに、おびたゞしうのぼる。さぞあるらん。東八箇國の大名小名、思ひくゝの鎌倉入りさぞ見事にて候らん。白金物うつたる絲毛の具足に金銀を延べたる太刀、刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間きらびやかに打連れくゝのぼるなかに、常世が常にかはりたる馬、物具や打物の物、そのものにあらざる氣色、さぞ笑ふらん。さりながら所存は誰にも劣るまじ。と心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。急げども急げども、弱きに弱き柳の絲のよれによれたる瘦馬なれば、打てどもあふれども先へは進まぬ足弱車の乗り力なければ、追つかけたり。

ワキ

時頼

ツレ

近臣

ワキ いかにか、誰かある。

ツレ 御前に候。

ワキ 國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。

ツレ さん候。悉く參りて候。

ワキ その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此方に來れと申し候へ。

ツレ かしこまつて候。

いかにか、誰かある。

狂言 御前に候。

ツレ 君よりの御諛には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へまゐれ。との御事にて候。

狂言 畏つて候。

いかにか、申し候。

シテ 何事にて候ぞ。

狂言
從者

狂言 急いで御前へ御参り候へ。

シテ 何と、某に御前へ参れと候や。

狂言 なか／＼のこと。

シテ あら、思ひもよらずや。定めて人たがへにて候べし。

狂言 いや／＼其方の事にて候。その仔細は、諸軍勢の中にていかにも見苦しき武者を連れてまゐれとの御事にて候が、見申せば、そなたほど見苦しき武士も候はぬほどに、さて申し候。

急いで御参り候へ。

シテ 何と、たとへば、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者にまゐれと候や。

狂言 なか／＼のこと。

シテ さては某がことにて候べし。かしこまつたる。と御申し候へ。狂言 心得申し候。

シテ げに／＼これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申しあげ、御前に召出され、頭を刎ねられたためな。よし／＼、それも力なし、いで／＼、御前に参らん。

と大床さして見渡せば、今度の早打に上り集る兵、きら星の如く並み居たり。さて、御前には諸侍その外、數人並み居つゝ、目を引き、指をさし、笑ひあへるその中に、横縫のちぎれたる古腹巻に、鑄長刀やうやうに横たへ、わるびれたる氣色もなく、参りて御前にかしこまる。

ワキ やあ、いかにあれなるは、佐野源左衛門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ。見わすれてあるか。いで、汝佐野にて申し、よないまにてもあれ、鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参ずべきよ。

し申しつる言葉のすゑをたがへずしてまゐりたるこそ神妙な
れ。

まづ、今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、
眞か偽かを知らんためなり。又當參の人々も訴訟あらば申す
べし。理非によつてその沙汰致すべき所なり。まづまづ沙汰
のはじめには、常世が本領佐野の莊三十餘郷返し與ふる所なり。
又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木
を伐り、火に焚きあてし志をばいつの世にか忘るべき。いでそ
の時の鉢の木は梅櫻、松にてありしよな。

その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合せて三箇の莊、
子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびけ
れば、常世はこれを賜はりて三たび頂戴つかまつり、
シテこれ見たまへや人々よ、はじめ笑ひし輩も、これ程の御氣色さ

梅田 加賀國河北郡梅田庄
櫻井 越後國西蒲原郡櫻井郷
松井田 上野國碓氷郡松井田町

ぞ羨ましかるらん。

さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。その中
に、常世は喜の眉を開きつゝ、今こそ勇めこの馬に打乗りて、上野や
佐野の船橋とりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。

— 觀世流謡曲 —

一六 尾形了齋覺え書

芥川龍之介

今般當村内にて、切支丹宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目を惑はし
候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一公儀へ申上ぐ可き旨、御沙汰
相成り候段、屹度承知仕り候。

陳者、今年三月七日、當村百姓與作後家、篠と申す者、私宅へ參り、同
人娘里、當年九歳大病に付き、檢脈致し、呉れ候様、懇々頼入り候。
右、篠と申し候は、百姓惣兵衛の三女に有之、十年以前與作方へ縁



了齋覺え書
東京の人
文學者
昭和二年歿（年
三十六）

付き、里を儲け候も、程なく夫に先立たれ、爾後再縁も仕らず、機織り乃至賃仕事等致し候うて、その日を糊口し居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、與作病死の砌より、専ら切支丹宗門に歸依致し、隣村の伴はて天連てんれんろどりげと申す者方へ、繁々出入致し候間、當村内にても、右伴天連の妻と相成候由、取沙汰致す者なども有之、兎角の批評絶え申さず、依つて、父惣兵衛始め姉弟共一同、種々意見仕り候へども、泥烏須でいす如來より有難きもの無しなど申し候うて一向に合點仕らず、朝夕唯娘里と共にくるすと稱へ候小さき磔柱形の守り本尊を禮拜致し、夫與作の墓參さへ怠り居る始末に付き、唯今にては、親類縁者とも義絶致し居り、追つては、村方にては、村拂ひに行ふ可き旨、寄り寄り評議致し居る由に御座候。

右様の者に候へば、重々頼み入り候へ共、私檢脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、一度は泣く泣く歸宅致し候へども、翌八日、再び私宅へ參り、一生の恩に著申す可く候へば、何卒御檢脈下され度など申し候うて、如何様斷り候も、聞き入れ申さず、はては、私宅立關に泣き伏し、御醫者様の御勤は、人の病を癒す事と存じ候。然るに、私娘大病の儀、御聞き棄てに遊ばさるる條、何とも心得難く候。など、怨じ候へば、私申し候は、貴殿の申し條、萬々道理には候へども、私檢脈致さざる儀も、全くその理無しとは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行狀誠に面白からず。別して、私始め村方の者の神佛を拜み候を、惡魔外道に憑かれたる所行なりなど、屢、誹謗致され候由、確と承り居り候。然るに、その正道潔白なる貴殿が、私共天魔に魅入られ候者に、唯今、娘御の大病を癒し吳れよと申され候は、何故に御座候や。右様の儀は、日頃御信仰の泥烏須如來に御頼みあつて然る可く、もし、たつて私、檢脈を所望致され候上は、切支丹宗門御歸依の儀、以後堅く御無用たる可く候。此段御承引無之に於て

は、假令、醫は仁術なりと申し候へども、神佛の冥罰も恐しく候へば、
 檢脈の儀平に御斷り申候。斯様、説得致し候へば、篠も流石に、推して
 とも申し難く、其儘妻々歸宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通も絶え候所、
 卯時ばかりに、篠、傘をも差さず、濡鼠の如くなりて、私宅へ参り、又々
 檢脈致し呉れ候様、頼み入り候間、私申し候は、長袖ながら、二言は御
 座無く候。然れば、娘御の命か、泥烏須如來か、何れか一つ御棄てな
 さるる分別肝要と存じ候。斯様申し聞け候へば、篠、此度は狂氣の如
 く相成り、私前に再三額づき、又は手を合せて拜みなど致し候うて、
 「仰せ千萬御尤もに候。なれども、切支丹宗門の教にて、一度ころび
 候上は、私魂軀とも、生々世々亡び申す可く候。何卒、私心根を不憫
 と思召され、此儀のみは、御容赦下され度候。」など搔き口説き咽び入
 り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二無き體相見え多少

とも哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廢す可らざるの道
 理に候へば、如何様申し候うても、ころび候上ならては、檢脈叶難き
 旨申し張り候所、篠、何とも申し様無き顔を致し、少時私顔を見つめ
 居り候が、突然涙をはらはらと落し、私足下に手をつき候うて、何や
 ら蚊の様なる聲にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確と聞
 き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸う、然らば詮無く候へば、ころび
 候可き趣、判然致し候。なれども、ころび候實證無之候へば、右證明
 を立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懷中より、かのくるすを取
 り出し、玄關式臺上へ差し置き候うて、靜に三度まで踏み候。其節
 は、格別取亂したる氣色も無之、涙も既に乾きし如く思はれ候へど
 も、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の様にて、私方下
 男など、皆々氣味悪しく思ひし由に御座候。

扱、私申し條も相立ち候へば、即刻下男に藥籠を擔はせ、大雨の中

を篠同道にて、同人宅へ参り候所、至極手狭なる部屋に、里獨り、南を枕にして打臥し居り候。尤も、身熱烈しく候へば、始め正氣無之き體に相見え、いたいけなる手にて、繰返し、繰返し、空に十字を描き候うては、頻りにはれるやと申す語を、現の如く口走り、其都度嬉しげに、微笑み居り候。右はれるやと申し候は、切支丹宗門の念佛にて、宗門佛に讚頌を捧ぐる儀に、御座候由、篠、其節枕邊にて、泣々申し聞かし候。依つて、早速檢脈致し候へば、傷寒の病に紛れ無く、且は手遅れの儀も有之、今日中にも、存命覺束なかる可きやに見立て候間、詮方無く其旨、篠へ申し聞け候所、同人又々狂氣の如く相成り、私ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを、落命致させては、其甲斐萬が一にも無之かる可く候。何卒泥烏須如來に背き奉り候私、心苦しさを御汲み分け下され、娘一命、如何にもして、御取り留め下され度候と申し、私のみならず、私下男足下にも、手を

つき候うて、頻りに頼み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる様、呉れ呉れも、申し諭し、煎藥三貼差し置き候上、折からの雨止みを幸、立歸らんと致し候所、篠、私袂にすがりつき候うて、離れ申さず、何やら申さんとする氣色にて、唇を動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る見る面色變り、忽、其場に悶絶致し候。然れば、私大に仰天致し、早速下男共々、介抱仕り候所、漸う、正氣づき候へども、最早立上り候氣力も無之、所詮は、私心淺く候儘、娘一命、泥烏須如來、二つながら失ひしに極まり候。とて、さめざめと泣き沈み、種々申し慰め候へ共、一向耳に掛くる體も御座無く、且は娘容態も詮無く相見え候間、止むを得ず再び下男召し伴れ、勿々歸宅仕り候。

然るに、其日未時下り、名主塚越彌左衛門殿母儀檢脈に参り候所、篠娘死去致し候由、竝に篠、悲歎のあまり、遂に發狂致し候由、彌左衛

門殿より承り候。右に依れば、里落命致し候は、私檢脈後一時の間と相見え、巳の上刻には、篠、既に亂心の體にて、娘死骸を搔き抱き、聲高に何やら、蠻音の經文讀誦致し居りし由に御座候。猶此儀は彌左衛門殿直に見受けられ候趣にて、村方嘉右衛門殿、藤吾殿、治兵衛殿等も、其場に居合されし由に候へば、千萬實事たるに紛れ無かる可く候。

追つて、翌十日は、朝來小雨有之候へども、辰の下刻より春雷を催し、稍晴れ間相さざし候折から、村郷士柳梁つばき金十郎殿より迎への馬差し遣はされ、檢脈致し呉れ候様申し越され候間、早速馬上にて、私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ來かかり候へば、村方の人々大勢佇み居り、伴天連よ、切支丹よなど、罵り交し候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず、依つて、私馬上より、家内の容子差し覗き候所、篠宅の戸を開け放ち候中に、紅毛人一名、日本人三名、各法衣めきし黒衣

を著し候者共、手に手にかのくるす、乃至は香爐様の物を差しかざし候うて、同音にはれるや、はれるやと唱へ居り候。加之、右紅毛人の足下には、篠髪を亂し候儘、娘里を搔き抱き候うて、失神致し候如く蹲り居り候。別して、私眼を驚かし候は、里、兩手にてひしと、篠頸を抱き居り、母の名とはれるやと、代る代る、あどけ無き聲にて、唱へ居りし事に御座候。尤も、遠眼の事とて、確とは辨へ難く候へども、里血色至極麗しき様に相見え、折々母の頸より手を離し候うて、香爐様の物より立ち昇り候煙を捉へんとする眞似など致し居り候。然れば、私馬より下り、里蘇生致し候次第に付き、村方の人々に委細相尋ね候へば、右紅毛の伴天連ろどりげ儀、今朝伊留いり満まん共相從へ、隣村より篠宅へ參り、同人懺悔聞き届け候上、一同宗門佛に加持致し、或は異香を焚き薫らし、或は神水を振り濺ぎなど致し候所、篠の亂心は自ら靜まり、里も程無く蘇生致し候由、皆々恐しげに申し聞か

せ候。古來、一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒に中り、乃至は瘴氣に觸れ候者のみに有之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未だ嘗て承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法なる儀此一事にても分明致す可く、別して伴天連當村へ參り候節、春雷頻りに震ひ候も、天の彼を惡ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶、篠及び娘里當日伴天連ろどりげ同道にて、隣村へ引移り候次第、竝に慈元寺住職日寛殿計ひにて同人宅焼き棄て候次第は、既に名主塚越彌左衛門殿より、言上仕候へば、私見聞致し候仔細は、荒々右にて相盡き申す可く候。但し、萬一記し洩れも有之候節は、再日再應書面を以て言上仕る可く、先は私覺え書斯くの如くに御座候以上。

—芥川龍之介全集—

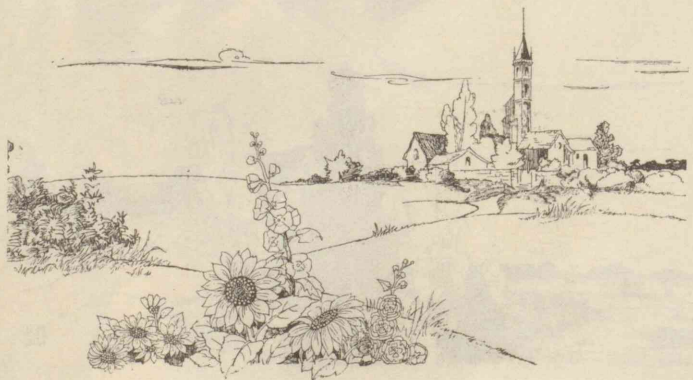


三木處凡
名は操
兵庫縣の人
詩人

一七 青空の鐘

三木 露 風

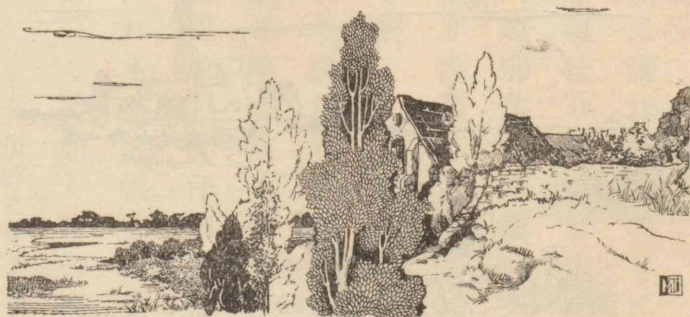
青空の
高きところ
鈴形の鐘懸かる
あはれその
鐘の音よ
こゝろに染みてひびく
鳴り鳴りて一の聲は
望の果に
ひろがりゆき



鳴り鳴りて二の聲は
朝あさ噉ひに覺めし村々と都の方の
生活の中に落つ

あはれその
鐘の音ぞ
和平と飛躍とを傳ふなる

氣晴れて
深碧の高きところ
鈴形の鐘懸かる



— 信仰の曙 —



(筆雲大村小)

高宗一興須那

一八 那須與一宗高

(平家物語)

さる程に阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯こゝの洞より十四五騎二十騎打連れ、馳せ來る程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。今日は日暮れぬ勝負を決すべからず。とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。あれは如何に。と見るところに、船の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴着たるが、眞紅の扇の日出したるを船のせがいに挟みたて、陸へ向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれは如何に。とのたまへば、射よ、とにこそ候はめ。たゞし大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇

をば射させらるべうもや候らん。」と申しければ、判官「味方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、手だれども多く候なかに、下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にては候へども、手はきいて候。」と申す。判官「證據があるか。」と「さん候。かけ鳥などを争ひて三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

與一、その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を著ておくびはたそでいろへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてはいだりけるぬための鎬をぞ差添へたる。滋籐の弓、脇に挟み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官「いかに與一、あの扇の真中射て、敵に見物せさせよかし。」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き

味方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾く疾く鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。

與一、重ねて辭せば悪しかりなんとやおもひけん。「さ候はゞ外れんをば存じ候はず、御説にて候へば仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷りたち、黒き馬の太く逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向つてぞ歩ませける。味方の兵ども與一が後を遙かに見送つて、「この若者、一定仕らんずると覺え候。」と申しければ、判官も頼しげにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ磯うつ浪も高かりけり。舟は揺りあげ揺りすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩別してはわが國の神明、日光權現、宇都宮那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國に歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鏑を取つて番ひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴りして、過たず扇の

要際一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉、二揉揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏箠を敲いてどよめきけり。

一九 夢應の鯉魚

上田 秋成

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像、山水、花鳥を事とせず。寺務の暇ある日は、湖に小舸をうかべて、網引釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、その魚の遊ぶを見ては畫きける程に、年を経て精しきにいたりけり。或時は繪に心を凝して眠をさそへば、夢の裏に江に入りて、大小の魚と共に遊ぶ。覺む

上田秋成
大阪の人
國學者
小説家
文化六年歿（年
七十八）
延長
醍醐天皇の御代
の年號
三井寺
滋賀縣大津市に
ある園城寺

ればやがて見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名づけり。その繪の妙なるを感じて、乞ひもとむる者前後を争へば、只花鳥山水は乞ふに任せて與へ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人毎に戯れていふ、生を殺し鮮を食ふ凡俗の人に法師の養ふ魚必ずしも與へず」と。その繪と俳諧と共に天下に聞えけり。一年病にかゝりて、七日を経て忽ちに眼を閉ぢ、息絶えて空しくなりぬ。徒弟友どち集りて、歎き惜みけるが、只胸のあたりの微し暖かなるにぞ、若しやと居めぐりて守りつゝ、三日を経けるに、手足すこし動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐きて、眼を開き、醒めたるが如くに起きあがりて、人々に向ひ、我人事を忘れて既に久しき日をか過しけん。衆弟等いふ、師三日前に息絶え給ひぬ。寺中の人々を始め、日頃睦まじく語り給ふ殿原も詣で給ひて、葬の事も計り給ひぬれど、只師が胸の暖かなるを見て、柩に藏めてかく守

り侍りしに、今や蘇りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよ」と

いひて悦びあへり。

興義點頭きていふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて原申さんは、『法師こそ不思議に生き侍本れ。君今酒を酌み、鮮けき鱠を作ら挿しめ給ふ。しばらく宴を罷めて寺繪に詣でさせ給へ。稀有の物語聞えまゐらせん。』とて、彼の人々のあるさまを見よ。我が詞につゆ違はじ」といふ。使異しみながら、彼の館に往



きて、その由をいひ入れて窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎、家子掃守など居めぐりて、酒を酌みゐたる、師の詞の違はぬを奇とす。

彼の館の人々この事を聞きて大いに異しみ、先づ箸を止めて、十郎・掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述べ。

興義先づ問うていふ、「君試に我が言ふ事を聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂へ給ふことありや。」助驚きて、「まことにさることあり。いかにして知らせ給ふや。」興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて、君が門に入る。君は賢弟と南面の處に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大きなるを啗ひつゝ、突の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛りたる桃を與へ、又杯を賜うて三獻飲ましめたまふ。膾手したり顔に魚を取出して、鱸にせしまで、法師がいふ所違はでこそあるらめ。」といふに、助の人々この事を聞きて、或は異しみ、或は心地惑ひて、かく詳なる言の由を頻りに尋ぬるに、興義語りていふ、「我この頃病に苦しみて堪

へ難きあまり、その死したるをも知らず、熱きこゝち少し冷さんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲居に歸るこゝちす。山となく里となく行きくゝて、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に、浴びて遊ばんとて、そこに衣を脱捨て、身を跳らして深きに飛入りつゝ、彼此に泳ぎめぐるに、幼きより水に慣れたるにもあらぬが、思ふに任せて戯れけり。今思へば愚なる夢ごころなりき。されども人の水に浮ぶは、魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨む心起りぬ。傍に一つの大魚ありていふ。「師のねがふこといと易し。待たせ給へ。」とて遙かの底に往くと見しに、しばしして、冠裝束したる人の、前の大魚に跨りて、許多の鼈魚を率ゐて浮び來り、我にむかひていふ。「海若の詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今江に入りて魚の遊躍をねがふ。かりに金鯉が眼を授けて、水府の樂み

長等の山
三井寺の西にあ
たる
志賀の大曲
今の唐崎附近か
といふ
比良の高山
滋賀縣滋賀郡に
ある山
堅田
琵琶湖の西岸に
ある
鏡の山
滋賀縣蒲生郡に
ある山
竹生島
琵琶湖中にある
島
伊吹
滋賀縣坂田郡に
ある山
矢橋
滋賀縣栗太郡老
上村
瀬田
滋賀縣栗田郡瀬
田村

をせさせ給ふ。たゞ餌の香しきに味まされて、釣の絲に懸り、身を喪ふことなかれ。』といひて、去りて見えずなりぬ。不思議のあまりに、おのが身を顧みれば、いつのまにか鱗金光を備へて、一つの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はて、尾を振り鱗を動かして、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山嵐立ちあがる浪に身をのせて、志賀の大曲の汀に遊べば、歩人の裳の裾ぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底に潜くとすれど、かくれかた田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の瀉にやどる月は鏡の山の峯に澄みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風にあま小舟も漕出づれば、葦間の夢さまされ、矢橋の渡する人の水馴棹を遁れては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風荒きときは千尋の底に遊ぶ。俄かにも飢ゑて食ほしげなるに、彼

此に漁り得ずして狂ひゆくほどに、たちまち文四が釣を垂るゝにあふ。その餌はなはだ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ、『我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なそもあさましく魚の餌を吞むべき。』とてそこを去る。しばしありて飢ますゝ甚だしければ、かさねて思ふに、『今は堪へがたし。たとひこの餌を吞むとも、嗚呼に捕られんやは。もとより彼は相識るものなれば、何のはばかりかあらん。』とて、つひに餌を吞む。文四はやく絲を收めて我を捕ふ。『こはいかにするぞ。』と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が鰓を貫き、葦間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に突して遊ばせ給ふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人大きに感でさせたまふ。我その時人々にむかひ、聲を張りあげて、『かたゝらは興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺に

かへさせたまへ。』と頻りに叫びぬれど、人々知らぬ形にもてなして、只手を拍つて喜び給ふ。膾手かしてなるもの、まづ我が兩眼を左手の指にてつよく捉へ、右手に礪ぎすませる刀を執りて俎つらにのぼせ、既に切るべかりしとき、我苦しきのあまり大聲あげて、『佛弟子を害する例やある。我を助けよ、助けよ。』と泣き叫びぬれど、聞入れず。終に切らるゝと覺えて、夢醒めたり。』と語る。人々大きに感て異しみ、師が物語につきて思ふに、『その度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議なれ。』とて、從者を家に走らしめて、残れる鱠を湖に捨てさせけり。興義これより病癒えて、はるかの後天年あまひをもて死まりけり。その終焉すゑに臨みて、晝く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、晝ける魚、紙縑しんをはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院

古き物語
古今著聞集を指す

の殿の障子に鶏を晝きしに、生ける鶏この繪を見て蹴たるよし、古き物語に見えたり。 | 雨月物語 |

二〇 新島守

(増 鏡)

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱かためり。かかれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治瀬田へ分ち遣はす。世の中ひびきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかがあらんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわただしく、色を失ひたる様ども頼もしげなし。

六月二十日
承久三年
泰時
北條義時の長男
時房
義時の弟

保元の例
保元の亂後、崇
徳院を讃岐へ遷
し奉つた例
院の上

後鳥羽院
女院
七條院・承明門
院・修明門院等
をさす

鳥羽殿
山城國紀伊郡に
あつた離宮
ものにもがなや
とりかへすもの
にもがなや世の
中をありしなが
らの我身と思は
む（源氏物語）



六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下ただ物にぞ當り惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつつ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや。」

信實
藤原隆信の子
出家して寂西と
號した
父子共に肖像畫
の hands
七條院
藤原信隆の女
後鳥羽上皇の御
生母
新院
順徳院
帝
仲恭天皇

中院
土御門院

とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御船に奉りて、遙なる波路をしのぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう、いかなりける世の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始なるらん。

さて上達部殿上人、それより下はた残りなく、この事に觸れにし類は、重く軽く、身に當る様いみじげなり。中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事いと恐あり。とおぼされて、御心もて、その

若宮
後醍醐天皇
承明門院
土御門院御生母
御名は在子

年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせたまひぬ。去年の二月ばかりにや若宮いできたまへり。承明門院の御兄人ぎょうじんに、通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、吹雪して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかかれとてこそ生れけめ

ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近き程に。」と東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

六つにて位に即きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひ

津の國のこやの
ひまなき

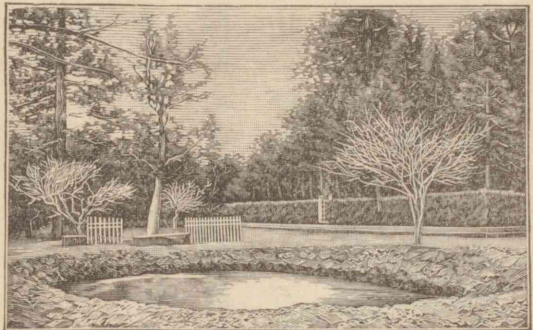
津の國のこやと
も人をいふべき
にひまこそなけ
れ葦の八重葦
(後拾遺集)

て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やうやう枝をつらねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり／＼てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとはかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、

明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時を果とか廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべき御様ども、くち

をしともおろかなり。

後鳥羽院行在所の址



このおはしますところは、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に「柴の庵のただしげし」とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、

故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりな

柴の庵のただしげし

いづくにも住ま
れずばただ住ま
であらむ柴の庵
のしげしなる世

に(新古今集)

水無瀬殿

攝津國三島郡に
あつた離宮

き心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹き來るを聞きめして、

われこそは新島守よおきの海の

あらし波風こゝろして吹け

二一 蜂

佐佐木茂索

佐佐木茂索
京都の人
文學者

村山吾一は仲間では、相當知られてゐる洋畫家だつた。腕も可なりの腕だつたが、彼が仲間うちで相當知られてゐるのは、腕といふよりは寧ろ彼の變に發明好きな點や、妙な事業を計畫したりする事の爲だつた。謂はば彼の有名といふのは、風變りな――元來が變り物の多い洋畫家仲間でもちよつと目に立つ風變りな――一言で覆ふと、彼は一種の人氣男だつた。ある年の正月、彼はその春の展覽會の製作に房州へ行つてゐた

が一先づ片づいて歸つて來ると、すぐ僕のところへ遊びに來た。

「君あすこはね。」と彼は云つた。「あすこはとても變な處だよ。冬だといふのに花が咲いてゐるのだぜ。何しろ冬のことだから、夏ぢやないやね。ね、冬のことだから、時々は東京みたいに寒い日もあるよ。だのに、花がふんだんに咲いてゐるんだぜ。酷くうれしくなつちやつてね、土地の者に聞くと、花は年中咲いてゐるといふんだ。變だらう？そして素敵だらう？俺は、だからよ、大金儲けを考へついたのでよ——」

かう聞くと僕は慙然と形容して然るべき顔で云つた——。

「君の大金儲けか。また例の——」

彼は皆まで云はせなかつた。それのみか一層熱心に説き續けた。

「そんなのぢやないよ、今度は確實なものだ。今までののは俺が

仕事しなくちやならない計畫ばかりだつたからね、だから、失敗もしたさ。だけど今度は——今度は、蜂が働くのだからね。」

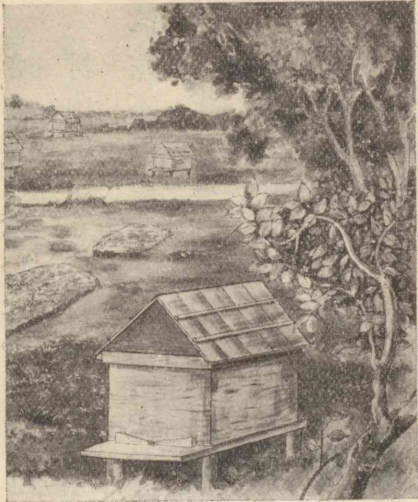
「蜂が？」

「さうさ。驚いたらう？」

村山はひどく得意だつた。彼の説に聽従すると、その素晴らしき花不斷の土地で、養蜂を始めるといふのだつた。年に一度くらい蜂蜜が取れるのぢや、餘程大規模にやらない限り、内職程度にしかならないが、年中取れるからは、十分商賣になるといふのだつた。「何しろ君、蜂が働くのだからね。あの働き好きの蜂が働くのだからね。今度こそは俺も金持になるよ。そしたらお前にも工房でも書齋でも建ててやるよ。」

村山は、春の展覧會の用事が片づく、と直に房州へ引返して行つ

た。勿論養蜂に従事する爲だつた。仲間うちでは、村山のやつ、また變なことを始めて、手を焼くんだぜ。」と云つてゐた。さうして、彼が嘲笑の中心になつたのはいふまでもないのだつた。



養蜂場

するとその冬に村山から、事業は大成功だ。」と云つてよこした。だからお前も遊びに來い、蜜をうんと喰はしてやるから。」と云つて來た。これが傳はると仲間のうちでは、「ほう、村山も時には成功するかね。」と批評した。しかしなほ半信半疑なので誰も蜜を喰ひに出かけはしなかつた。

その翌年の冬だつた。あれつきり音沙汰のなかつた村山が飄

然とやつて來て、

「おい、また畫だ。また描くんだよ。」と云つた。「畫描きは畫だよ。」

「畫描きは畫だ？ 養蜂はどうしたんだ？」

「養蜂か。あれか。それがさ。」

村山の云ふところに據ると、最初の年は非常な成功で多量の蜂蜜を得ることが出來たのだつた。それで直ぐさま分蜂して、箱の數を二十倍にもしたのだが、何としたか、翌年は少しの蜜も採れないのだつた。彼は驚いて原因を探ねようとした。彼は専門家を叩いてその説を訊いた。するとその専門家は、哈哈と笑つて村山に教へて呉れた。

「それやあなた駄目ですよ。年中花があるのでせう？ ぢや蜂は働きませんよ。蜂が蜜を貯めるのは冬に備へるためですからね。その肝心の冬になつても花があると分つては、もうそ

の年から蜂は働きませんよ。最初の一年は知らないから成績がよかつたので、翌年は蜂が心得ちまつたのですから駄目だったのです。蜂は人間に蜜を供給する爲に勤勉なのぢやありません、彼等の自活の爲ですからね。食へれば蜂だつて働くものですか。蜂は生れつき勤勉だなんて、そんな事は嘘ですよ。」

「かうなんだからね。驚いたよ。」村山は他人の事のやうにのんきな顔をしていつた。「だから、――畫描きは畫――まあ畫を描いてるんだね。」

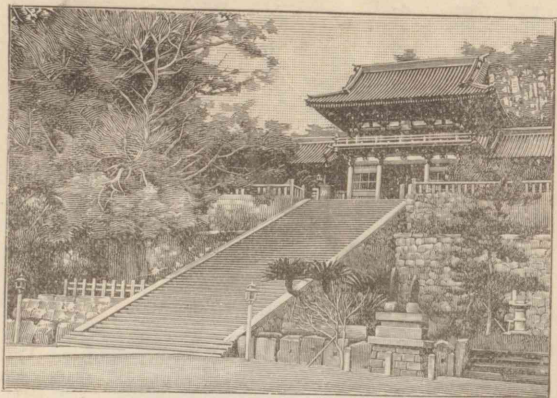
僕は、最初村山の計畫を聞いた時とは又別な意味で、惘然とした。

―新選佐佐木茂索集―

二二 銀の猫

上田 秋成

文治
後鳥羽天皇の御
宇の年號
鎌倉の大將殿
源頼朝



鎌倉鶴岡八幡宮

文治その年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遅からず、列を亂さず練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して、あなただに言はず、世にいかめしく尊き御有様なり。

かへりまをしして、御手輿に召させ給ふ程さとき御毗に見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣の許に畏まり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦せ黒みづきたるに、衣・杖・笠なども乞食者の様したるが、目を偷みてうすずまりをる、な

ほ人ならずや思しけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ。」と仰せたらふ。御輿添の若侍急ぎはしり寄りて、有難く御目賜へり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ。」といふ。不意に驚きざまして、「雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、さればこそ聞き知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ひならで、賢き人得たる例に、誘ひ歸らん。わが後につきて來れといへ。」とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせたまへば、やがておほとなぶら數多照らしかゝげたり。「けふの道行づと將てこ。」と仰せたらふ。「法師まゐれ。」とて、御座近き一間なる所の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひしみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎きの譽れはもの心なきあづま人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂

のなかには、玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ。」と仰せたらふ。いみじく畏まりて、思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いと



お月夜

もかゞやかしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍りて、聞え奉るべきことも侍らず。さとき御眼に見現はされて侍るこそ、いとも有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひあることも打ち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に

羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲霜枯の淺茅が下の蟲の音いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。」と申す。

うち笑ませ給ひ、弓取りし人のもとの心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み移すまじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶きは物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍には立たせ給ひし。その御歌を読み見奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ打ち聞き侍れ。いでや歌よまんとては、ますらを心をとりに隠し、あてになよびかにのみ詠み移すべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさとく猛き御心のまゝに打ちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあへ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起り

大風起り
漢の高祖の作

烏鶡南に
魏の曹操の作

雲飛揚す。」とうたひ、槊を横たへて、「烏鶡南に。」と詠ぜし君たちは鞍のうへにて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初めより優れたらんはかたくこそ侍らめ。」といふ。

「人々あれ聴き給へ。世は捨て遁れても、たのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらん。一言にても承らばや。」こは益、恐れある御問はせなり。御物語のはては、は、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住所の瘦法師にだに物問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳へなりなどとして聞こえ奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈

病める士卒の疽
をすふ
周代の兵法家呉
起の故事

みをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいたづらものの弦ひき一つだに心にとゞめしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、「賞を重くし罰を軽くせよ。」といひしと、「任ずるものを辱しむれば危し。」といひし有難さよ。士卒の疽を病めるを吸ひしは、人の心をよく買ひなすといへども、眞の情よりとも覺え侍らず。竈を減らして人を危きに陥るは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。軍を出だし給へることの怪しきまで賢くましまするを、餘所ながら見聞き奉るには、この方の御問ひ、免させたまへ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今ははたしてん。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まれびとは酒飲まざるべし。鹿猿の中に立ち交りて歌詠

めといふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。風ひやゝかなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は暖かにもこそ、



(筆齋容池菊)

西行と銀猫

この火取法師に參らせよ。」とて、白がねもて作りたる、猫の形したるを取り傳へて、「君より賜はる。」とて、前に置きたり。「鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師がために、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度押し戴きぬ。

あした御暇賜はりて立ち出づるに、御館の人やどりに、誰殿の童ならん、括袴くわくはかまの裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、「これ取らせん、火埋みて手足あたゝめよ。」とて、かのきら／＼しき物を與

へて、顧みもせず立ちぬ。童うちおどろき、「これ見たまへ、見も知らぬ法師の見も知らぬものたまひつるは」とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を、誰かは得させん。拾ひやしつる」といふ。「さらに、道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りてたまへ」といふ。やがて御館にもてまゐり、仕ふる君を呼び出で、しかくのことなんと申す。「いと怪し。大將殿の法師にたまひしを、いかで童には得させけん。訝し」とて、まづいそぎて聞え奉る。君うち笑みたまひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。ひとたび穢れしもの、その童に取らせよ」とて、取りおろさせたまひぬ。

漢高
漢の高武帝

西行後にこの事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはずぞ。漢高の大度、曹孟

曹孟德
魏の武帝

徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふことを生まれ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔みすゑの、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは。とて、涙とゞめ難くして物がたりしとなり。心なき身にも、これを聞き傳へては、秋の夕暮ならずとも、うち響みぬべし。―藤篋冊子―

二三 歌人西行

藤岡 東圃

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齋しくし、鎌倉室町の世、抑歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれしとき、稱讚の聲又定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集やまがしむの一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖々たるは、抑、何が故ぞ。



藤岡東圃
名は作太郎
金澤の人
國文學者
文學博士
明治四十三年歿
(年四十一)
定家
藤原氏
歌人
新古今集の撰者

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義清は名利を喜ばずして常に厭離の志あり。その出家の動機については或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、「殿は昨夜頓死したまへり。」とて、若き妻老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念さらけに堅し。官を辭して許されざれども、「棄恩人無爲」は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧み

保延
崇徳天皇の御代の年號

右幕下
右近衛大將源賴朝
大師
弘法大師

高尾
京都府葛野郡高尾山神護寺

もせて家を遁れ出て、嵯峨に至りて剃髮せり。と。かくて、名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさにも二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一介の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修業の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。

「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す者。」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋ね悦びいり候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子



文 覺

たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰せに違ひたるは、と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か、文覺をこそ打たんず

るものなれ。」といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて詠じて曰く

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの即ち山家集なり。



僅かに三人、西行宗祇芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じてまた西行宗祇が行狀を慕ひしもの

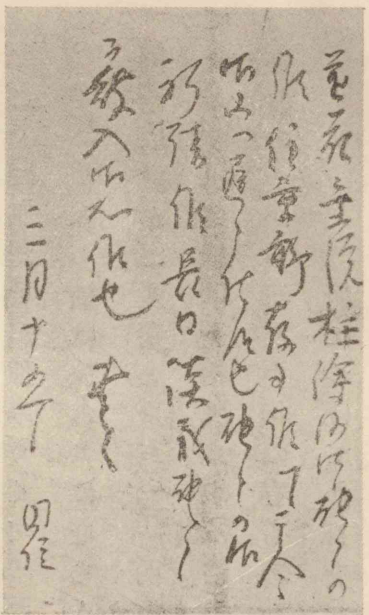
宗祇
飯尾氏
連歌の名家
文龜二年歿

とす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おのゝその道に一期を劃せし三家がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかにか詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そもく平安朝の貴紳淑女は、鴨桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の経過極めて單調に、情感を刺衝するものなかりければ、従つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の工にも、おのづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる

筆蹟

連花乘院柱繪沙
汰、能々可レ候住
京聊存事候て于
レ今御山へ運々
仕候也 能々可レ
御祈請候長日
談義、能々可レ被
レ入ニ御心候也
謹言
三月十五日
圓位



西行筆翰の部一

にすればなり。わけて西行が歌ふところ一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さ

るゝこと、また宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して、これを視ること猶己を視るが如く、同情の

念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

こゝにまた我が住みうくてもうかれなば

松はひとりにならんとすらん

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨

てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆゑをしくなる命かな

愛着は迷なり。此の雲を去らざれば眞如の月は明かなり難し

と雖も、山水もと無心にして人間の如き魔性を有せず。これを以

て窓前日夜の友とす。清深虚無一心もまた物によつて動かされ

ざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、こ

こに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

安く待ちつゝ、今日もくらさん

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

厭ふとしてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。そ

のいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人為の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

—國文學全史—

二四 故郷の母上へ

八 波 則 吉

八則波吉
福岡縣の人
第五高等學校教
授

陛下
今上陛下

天杯御下賜、母上様、お目出度う存じます。遙かにお祝ひ申します。陛下が御即位禮を行はせられるについて、八十歳以上の長壽者に天杯御下賜の旨が新聞紙上に傳へられるや、私は飛び立つやうに喜びました。そして、取敢へず兄上に御祝狀を差出しました。すると、兄上の返事に「残念なことには六箇月不足のた

めその數に洩れられた。」とありました。私は非常に落膽しまして、懸應にどの縣下も満八十歳以上かどうかと尋ねに參るつもりにきめてみましたところが、翌朝の新聞で、數へ年で宜しい調べ直せ。」との恩命があつた由を知つて、母上様、實に私は蘇生しました。

蘇生といへば想ひ出します。一昨年夏、あなたが九死一生の場合、私はあなたの枕に取りついて、お母様、あなたは私の力です。」と無我夢中に叫びました。その聲が昏睡状態のあなたのお耳に響きまして、「この皺くちやの婆を、子なればこそお前は力にも思つてゐるのか。」と仰せられました。それからあなたは、出来ることなら助けて下され。」と氏神様に祈願なされ、奮發してお薬も飲まれ、お粥も啜られ、そしてやつと蘇生されましたと、かうあなたから後日承つたのです。果して私とその刹那、お母様、あなた

故郷有母
中野造彦作の詩句

は私の力です。」と叫んだか否かは私の記憶には判然しません。しかし、母上様、今日でもあなたは私の力です。「故郷有母、秋風、涙」これは事實です。「ふる里に老いたる母の在すなり、いたくな吹きそ秋の夕風。」これも赤子の至情です。たとひ、あなたの腰は屈り、眼は薄く、歩行は自由でなくても、「吾に母あり。」との念は、いかに遊子の意を強くするものでございませう。況んや八旬の高齢で、尙且壯者をも凌ぐあなたの御健在はよ。母上様、實にあなたは私のためには千萬人力で、おあり遊ばします。

大鏡

文徳天皇から後一條天皇迄の歴史を記した書

大鏡といふ書物の序文に、

「むかし、賢き御門の御政のをりは、國のうちに年老いたる翁、嫗やあると召し尋ねて、古の掟の有様を問はせ給ひてこそは、奏することを聞召し合せて、世の政は行はせ給ひけれ。されば、老いたる身はいとかしこきものに侍り。若き人達な侮り給

ひそ。」

とあります。もとより片山里の賤の女が、何等國政の足しにはなりもしますまいが、しかしながら、代々の御門は畏くも、

「まづ、天下の公民の上を慈しみたまはく……」

と宣らせ給うて、まづ養老のことを遊ばされます。我々人民を「おほみたから」とさへ仰せ遊ばされるのです。そして、

「この食國天下を撫でたまひ慈しみたまふことは、ことだつにあらざ、人の祖のおのが弱兒をひたしをさむることのごとく、治めたまひ恵みたまひ來る業となも神ながらおもほしめず。」と古い時代の宣命にも見えてゐます。即ち代々の聖天子様は、國民を子のやうに御慈しみ遊ばされるのでございます。

民のため時ある雨を祈るとも

知らでや田子の早苗とるらん

まづ、
元明天皇御即位の宣命

これは後醍醐天皇の御製だとか承つてゐます。實際さうです。「親の心子知らず」です。年毎の祈年祭に、一天萬乗の大君様は、御親ら豊年をお祈り遊ばされ、年毎の新嘗祭には新穀を皇祖皇宗に奉らせ給ひ、大嘗祭には御親ら御神饌を御親供遊ばしますさうです。

葦原の國富まささんと思ふにも

青人草ぞたからなりける

これは先帝陛下の御製ださうです。百二十三代の各天皇様方が、皆かやうに人民を御愛撫遊ばし給ふのであります。臣民たるもの、赤子の至情を盡さないで宜いでせうか。

天杯御下賜、母上様、年寄はやがて家の寶であります。で、至尊に於かせられても、まづ老人を御愛撫遊ばすのでございます。聞くところによれば、我が國は世界で名高い長命國ださうです。

先帝陛下
大正天皇

この度、天杯御下賜の光榮に浴する高齢者が四十萬人にも及ぶさうです。「養老」の朱杯に酒肴料までお添へ遊ばされるとか承ります。四十萬人に天杯と御酒肴料、これだけでも大した御費用かと存じます。これを思へば子たるもの、孫たるもの、親を慰め、祖父母に仕へないで何としませう。孝が即ち忠です。親に仕へるのは君に仕へる所以です。母上様、私ども同胞があなたに盡すのは恐れ多くも、今上天皇陛下の大御心に副ひ奉るのでございます。これを思うて、私は幾度か感涙に枕を濕しました。畏くも陛下は、何縣何郡何村大字何といふ片山里のあなたをば非常に御鄭重に御愛撫遊ばされます。然るに、私、あゝこの子たる私があるに、どれほど盡してゐましたらう。思へば慚愧に堪へない次第です。

天杯御下賜、母上様、始めて夢が覺めました。どうぞ達者でゐて

嬉しさを
古今集（讀人知
らず）

下さい。あなたには私の力です。そして私もあなたの力となります。別封、その一部は氏神様への御神酒料です。その餘はあなたのお友達に一獻差上げて下さい。氏神様のお蔭です。御近所の方々のお蔭です。氏神様と御近所の方々と、皆して陛下の萬歳をお祈り遊ばせ。私も地方賜杯の光榮に浴します。これもあなたのお蔭です。皆様のお蔭です。氏神様のお蔭です。嬉しさを何に包まん唐衣（唐衣は唐の朝服で、袂は袖口を飾る部分）袂（袂は袖口）ゆたかに裁てといはましを（これは古の歌）嬉しさが袖や袂に包みきれないといふ意味の古い歌です。私も嬉しさが包みきれず、遂に筆を執つてかくは認めました。

帝國新國文卷八終

帝國新國文 卷八

定價 金五拾六錢

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月四日發行
昭和八年八月二日訂正印刷
昭和八年八月五日訂正發行

許 製

編者	藤村 作
發行者	株式會社 帝國書院 代表者 増田 啓策
印刷者	山本 禎 男
發賣所	株式會社 帝國書院 振替口座東京六七〇二四
關西發賣所	大阪市東區横堀四ノ三 三宅莊藏書店 振替口座大阪六九

清
國
文
書
八

清國文書八
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、

第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八
...

...

